である。手近な特別方法を擧げて見る。

個性研究　めい〳〵の天性（ウヰルヌ）や癖をしらべ、互に其改善法を研究し實行するのである、一ヶ月後には、其成績を擧げて見るもおもしろかろうと思ふ。又人は親の子であるかぎり、必ず親に似てゐるところが多少あつて、青年時代に見へぬでも、年を取るにつれて、だん〳〵と表れて來て、若い時には、あれが親子かと思はれてゐる人でも、老人になると、親其まゝになつて人を驚かすことはよくある事である、そこで自分の研究も大切であるが、よく親の研究とは少し不道理に聞こえるが、世間の人の評判などを聞き且自分も毎日其長所、短所を見てゐることである。からよく〳〵反省し忠告しあふがよいのである。

智德交換　古人も言ふた如く「人みな事後に賢なり」で、多くの人は、やつてしまつた後に、よい方法を考へ出して、後悔するものである、又常に思ひがけない所から、ために、なる事を見聞するとも少くない。これ等の事を毎日集つて話し合ふのである。

養心會　近頃盛んに唱へらるる、氣海丹田法、腹式呼吸とも言ふ、又は精神治療法、臍ためし、などを修めるのである。

先輩訪問　手分して、先輩名士を訪ねて、其說を聽き、經驗談をしてもらつて、歸つてから話し合ふのである、二人以上手分けするもよし、皆が行くもおもしろい、心ある人々は、喜んで迎へるであらふ、しかしよく禮を辨へねばならぬ。

忠告會　岡目八目で、人のことはよく目に入る、そこで會員に忠告したくとも、面と向つて出來にくいものゆゑ、忠告せらるる人の名、及忠告する自分の名と忠告の文言を認めて、函に入れて置く、それを會長自ら定期に開いて檢し、もつともであると思ふたなら、皆の前で讀み上げ

る時にはどちらの名も言はず、本人の良心に訴へる、それで本人の悟らぬ時は、忠告をうける人の名だけを言ふのである、又其同情すべきは勉め、改善すべきは、お互に方法を考へ反省するのである。もし怪しい忠告であつたならば、其忠告人を讀んで、眞相を篤としらべ、本人を呼んでそつと忠告してやるがよい。自分の名まで記して忠告するのであるから、男らしき情を以て忠告するであらう。しかし會長の人格がよくなくて、それに任すことが出來ない場合、又は會員多數の意嚮ならば、名なしにしてもよい、まづせぬにはましであるから。

自治研究、田園趣味の研究（これ等については別に言ふ機がある）

(二) 讀書會

十人で多く書を讀むことは六ヶ敷く、又多くの時間を費して讀んでも案外實のないものである、ましてや同じものを皆が讀むことは、一冊では廻り切らぬし、又無駄である。これを有効に經濟的にするため、申し合せて、各手分けして、書物、新聞を讀み、其必要と思はれる箇所を、注意し一同集つて手短かく、面白く說明仕合ふのである、或る人は新聞好きであるから新聞、ある人は講談ものが好きゆゑ講談物、又は實業書とか、農業書とか、法律書とか、各得手々々に受持ち、愉快に手輕に知識を增すことが出來るのである。

(三) 申合規約

細い申し合せ規約を定めて、之を實行するので、一人でするより、多人數申し合せてする事故、割合都合よく、少しく道がつけば、どし〳〵やつて行けるのである、けれども、よく注意していよ〳〵出來る見込のあるものから、一つ二つとやつて行くので、初めから六ヶ敷いものを定めて、實行が出來ず、次から定めたものまで、死んだ規約になつてしまふような

ことのないようにせねばならぬ。今では全國有數の鹿兒島報德結社（花田仲之助氏主宰）の如きは、初めは白紙の規約帳を設け、實行し得るもの、殆んど今時の青年が、鼻であしらふようなものを、僅か毎年三つか四つ宛履行したのである、ところが、このなんでもない事がなか〳〵守れない、それが又よく守れるようになつて、極めて健全な進歩をして、あの大勢力となつたのである。これ等は手本にすべきことである。

言語改良　昔より口は禍の門と言ふて、最も愼むべき事であつてそのくせ習くもなければならぬものである、ベチャ〳〵しやべり散らすも、壓はしいが、それかとて、默つてゐるのもつまらぬ、それ故一日も早く改良して、ずら〳〵と聞よい言葉を愉快に話し合へば、人情も自然圓くなつて、いろ〳〵な利益の見へてくるものである、同じ洒落にしても言ひ樣一つで、下品な耳にするさへ、厭はしいのと、いかにも面白く席を賑はすとの差がある、ましてや田舍人は口が不調法の上に、惡い、そしてつまらぬ考を起させるような事を平氣で言ふので、案外恐ろしい影響を及ぼすものである。

しかしなか〳〵改良は急ぐわけにゆかぬ、それゆえ、まづ一つ二つを月の事業とし、初めは集會の場などに限るとか、又は言語練習をするもよい、罰金をとるところもある。

時間勵行　よほど矢釜しく、言ひ出したが、それの裏で妙な時間がある、〇〇時間とか言つて、二時といつたらば三時、三時とあれば四時と言ふように、必ず三十分か一時間は、曠直としてある、これがまたどこでも、流行る日本時間と言ふてもよからう。ある人々は亡國時間といつてゐる、朝鮮人を去ること遠からずであらう。

これは大平樂な昔しの古手で、改良せねばならぬこと勿論、ましてや、時

間をやかましく言よ、歐米人と競爭の今日、うか〳〵してはゐられぬ、第二の國民として、わが日本帝國を負ふて立つ青年が、老人の眞似をしてゐては、困るではないか、こんな事が、わからぬ筈はない、よくわかつてゐて、守れないとは、妙である、守れぬのではない、守らぬのである、それを皆が約して一度に行へば、きつとやれることである。時間の守れる學校の進歩は誰も知り抜いてゐるところ、又時間の守れぬため、いくら不都合な思ひをするかは、青年會が出來た今日、追々皆の頭に入つてゐる筈である。一事が萬事時間の厲行などは、初からやつて行きたいものである。會場には、出來るだけ早く、時計を備へたいものである。

服裝一定　並みの人の最も心を使ふことは、服裝であるかも知れぬ、人情として無理もない、よく考へて見れば、馬鹿々々しいよりも氣の毒で、こんなつまらぬ事で、いろ〳〵の不都合をするかと思へば、何とかよい方法を考へねばならぬ。衣服のよいものをこしらへれば、ほかのものも、これに釣合ふようにせねばならず、それが出來には上と進んで、止め所がない、親に心配をかけるどころか、血氣盛んな、青年が、そろ〳〵女のやうな眞似をして、心までニヤケて來る、もうこうなつては取返しのつかぬ、慾け者となり、其癖金使ばかり荒く、他人が、眞面目になつて、世間から賞められるのを、羨んでゐたんでいろ〳〵な妨げをする、之れが又少し旦那顏する親でも持つてゐようものなら、仕末に了べぬ、本人は氣附かぬだけ、其不幸も大きいので、可愛さうでもあるし、青年會發展の邪魔になること少くないのである。

そこで規約を定めて、平日も祭日も一定し、皆が同じ物を、揃へさへすれば、もう女子供の批評もなくなつて、つまらぬ衣裳くらべがなくなり、氣樂なくて心地よく、且費用は安く上り、共同一致の精神にも叶ひ、萬事に

都合がよいのである。そして例年五圓の衣服をこしらへる人が、三圓ですんだならば、差引貳圓を儲けた事として、貯金をするがよい、申す迄もなく、衣服は丈夫で、見榮えのある、落ち付いたものを選ばねばならぬ、私はいつも、さう思つてゐる、絹物を着てゐながら、木綿物にも劣る着ざまする人が多い、木綿物を絹物にも劣らぬように着る事は易い、これ程結構な事を知らぬ人は氣の毒なものであると。

禁煙禁止、賭博禁止、頭髮五分刈、朝起、禮儀、冷水浴、金錢貸借禁酒、禁煙附錄參照）乘車等についてのようなものはいくらでもあるが、一々書き立てるまでもあるまい。

(四)視察旅行

見學旅行である、百聞は一見に如かずで、昔時には相當な年になれば、一度は伊勢參宮をする事になつてゐた所が多く、又そんな所の青年の氣風は比較的他よりは良かつたさうである、伊勢參宮に出發するまでの樂しみと勵みがなか〳〵一通りでなく、そして參宮して、崇高な氣に打たれるのも、金錢で買ふことの出來ぬものであるが、なほ其道中で、種々珍らしいもの、異つたものを見聞きしたり、他國人と交際し、おかしな失敗もしたりして、世の中一と通り見て歸る事になり、人相應になか〳〵の益があつたものである、まして今頃は、日に月に新しい事が出來、一年見ねば全く變つてゐると言ふ世の中ゆゑ、時々都會とか模範村とかを訪ね、又は變つた職業の狀態を視に出る事は、必要である、今の世の中は廣いから、一鄕、一郡、一縣といふも畢竟同じ井戸の中、蛙の馬鹿を眞似てはつまらぬ。

毎年一度、會員中から人選して、旅費の全部、又は一部を給して視察に出すとか、甲地まで行くものを、乙地まで行く便利を與へるとかするよう

にし、本人等も歸つてから、報告するのである。多少熱心な町村であれば、相當の補助もするであらう。毎月一定の貯金をして、三年なり五年なりの計畫としても結構である、近來は鐵道も開通して、都會も近くなつたのであるから、平常は平和な美しい田舍に住んで、時々都會に出るやうにするが、いかにもおもしろい方法と思ふ。

觀察旅行の弊害は、田舍人に限るわけでもあるまいが、我れこそは、青年會長なりと言はん計りの權式で、不相當な金のかゝる旅行をして、(養笠旅行がどんなに、面白く有益であるか知れない)そして都會人士の浮薄なところばかりが、目につき、田舍生活を今更のように賤しみ、模範村の視察も、只漫然と訪ねて行く、そして通り一ぺんな、口上を丸呑みにして歸つて、一も二もなく眞似て大失敗をやつて、視察の効能を疑はしめ、害を思はしめ、模範村を、罵つて何の爲めに視察したやらわからぬ結果に終るのである、何おれこそは、と言つたとて、餘程しつかりしてゐぬと、五十歩百歩である。之れで相當な準備をして、敏捷に、熱心に走り廻つて正しい効果をうんと擧げねばならぬ。

(五)研究會

夜學の時期でなくとも、一定の日時を定めて、種々な研究をする事は肝要である、議論ばかりでなく、實地やつて見て、結果のよいものは世間に廣め、世の益と各自のためを謀らねばならぬ。迷信を破るため、妖怪退治をして見るも面白く、老人などは、學問こそないが、實地の功で、却つて學者の言ふ事よりも間に合ひ、結果のよい方法を知つてゐるものであるから、日常尊敬して、其經驗談などを研究の資料とせねばならぬ。

研農、共同苗代、撰種、肥料、小作米改良、共同耕作、掟米調製、表裝試作、種子交換、害蟲驅除豫防、副業、共同採種、栽培法、季節行事、

水產、工業、商業に關するものは略す。

(六)　夜學會

其必要は、如何なる山間僻地でも認められ、着々實行せられてゐるし、青年團が、官廳より旌表せらるる理由は、主に補習教育の効果顯著なるを以てとあるによつても、考へることが出來る。今では小學校のない所はないし、教育に關する研究も進んでゐるから、くだ〳〵しく申さぬでも、よい樣なものであるが、青年夜學は餘程異つてゐる所もあり、世間の經驗も淺いために、失敗はないにしても、進歩と言ふものがないのみならず、一寸手出し兼ねてゐる人もあらうと思ふから、聊かの經驗を基として述べて見よう、まづその困難な點と改善方を考へて見る。

一、まづ青年間に、また勉强したいと言ふ考が足らぬ、これは競爭の激しくない地方で、まして多く自分よりも、まだ〳〵無學文盲なものが多いところでは、小氣でゐるも、無理はない、このまゝで放つて置いては ならぬから、いろ〳〵と刺撃を與へるのである、他の青年團の狀況を話し、世の中を知らしめ、親しき發明ある毎に說き聞かせ、學校備へ附けの器具を見せ、理科學の實驗をして見せるやらで、好奇心を與さしめ好學心を養成すると共に一方では、無學から來る失敗や困難や恥ぢを知らしめ、父兄をも、たゝいて自然學問に向ふようにするのである、小學教育が普及し、どんな小童までも、學問を知り、年一年と上の教育を受けるものも增して來るのであるから、青年をして好學に向はしめる、方法はいくらもあらう。

一、教師に其人乏しく、學ぶ青年も興うすく、自然進まぬことである。これは、小學教師が昔し風のくそまじめな流義が取れぬうへに、兒童とはちがつて種々取扱に困難な點が多い、そこで、つひ堅苦しくなつて

圓轉な所がないから、活氣ある青年と共に進んでゆくことはできぬ。ここは今迄の村夫子流を改めても少し大膽に青年に接し、青年もそれを誤解せず禮儀も守り、敎師の方のことも考へてゆけばお互によく行くであらう。

一、小學敎育と異つて、研究のできてゐる、敎案、細目等をまとめる事が困難なため只漫然と敎てゐる、これはまことに困難な事で、餘程の博識な且確かな見識のある人でなくては、やり通す事は出來ぬ、それゆえ時間が來ても次から次と進むわけに行かず、お互にぼんやりしてゐるか、又は籤から棒的な事になつて、熱心を失つてしまふのである。これは、まづ敎師の今少しく、大膽な常識的な修養を希むと共に、敎案細目を、不完全でもよいから、定めてかかるのである、これは當事者が個人でこしらへるか、すつと上の機關や人物が研究の上こしらへるかせねば、とても、まとまるまいと思ふ、郡や縣の敎育會の力を頼んではは駄目であらうと思ふ。

會員にしてはあまりくだらぬ事を尋ねたり、揚げ足とりを嚴く禁ずるがよい。

敎師も今少し、見識をもつて、青年を戒めて、くだらぬ質問を禁じ、生意氣な揚げ足とりを禁じ、更に必要な他のものを示し、淡泊に知らざるは知らぬとして、言ひ放つてしまふがよい、なまじ自重をとりそこねて、知つたかぶりをして、こちつけを言つたり、説明を惜しむ風をしたりするから、案外青年に、内兜を見すかされて輕蔑をうけ、知らず〳〵揚げ足採りを、誘起するやうになるのである。

一、青年の學力の程度が種々雜多で、おまけに、出席が常なしであるから更に不便を來すのである。これはまづ學科の配合をうまくし、説明

を平易におもしろくすると共に、出席を力めしむるようにするのである。學科の事は別にして、出席奬勵法としては、具體的には、組長制度、組制度を定めて、相互の誘ひ合ひを力めしめ、毎月の結果を公衆の前に發表し、學期の終り閉會式には精勤の證を與へ、會衆の前に正しく發表するようにすれば、青年の感ずる事甚しく、鄕人も種々の刺戟を與へるので、年一年とよい結果を表して來るのである。

一、敎師の說明が、唯一人呑込みになつたり、丁寧反復を缺いたり、實地と餘りに離れてゐたりするのがおもしろくない結果を見るので、よく考へねばならぬ。

一、敎室内の設備が、良くないので、居心地が悪く、飽き易く、勞れ易く、つひ不熱心になる事が多いのである、なまじ僅かの費用を惜しむで、やりばなしにしておいたり、燈火は暗く、室は寒く又は蒸し暑く、腰は痛しといふ有樣では、一文惜しみの百知らずになつてしまふ。

一、**夜學細則**　時期、時間割、程度、組分け、休日、學科細目、敎案形式等を定める。

一、**時期及時間**　家業閑散な時を選ぶ事勿論、毎夜二時間を普通とし、力めるところは三時間もやつてゐる。又一定の期間續けぬで、毎月三回位、期日を定めて開會してゐるところ、二十歳前に一回二十五歳までに一回三十歳までに一回と定めて、期間に定めた學科を學習する樣に定めてゐるところもある

一、**時間割**　一時　二時　三時

月　修身書方　讀方

火　算術　讀方

水　算術　綴方　農業(漁業)

木　修身、書方
金　綴方
　　讀方
土　算術
　　歷史、地理、理科
日　作業
　　談話(笑)會

一、學級及程度

甲組　高等科卒業生以上　(特別科、補習科)
乙組　尋常科卒業以上　(本科)
丙組　尋常科程度　(豫科)

一、進級　何時にても、其程度に達し、現在の學科を學びて、他生と共に進み得るものは、進級せしむ。

一、休日　日曜日、祝日、大祭日にして談話會、娯樂會を開く。

一、學科　修身科、最も重要なもので、其効果を擧げねばならぬ。

甲組は　敎育勅語衍義、道德經濟に關するもの、
乙、丙は　敎育勅語衍義、
　　會員をして、各自の行爲を反省せしめ、之を批判し
　　又は之を標準として道德談をなす。時々名士の
　　出席講話を乞ふ。

國語科

甲組　國民讀本、公民讀本、農業讀本、實業補習讀本、新聞、(近所の都市の書店に申込めば、目錄を送つてくれる)國民中學會、高等普通敎育、國民敎育等の講義錄、
乙、丙　國定小學讀本、
綴り方　系統的日用文範、證書、屆書類より敘情文、論說に入る。
書方　階、行、を主とし草を加ふ、國定手本を主とし、綴り方の

成績品の清書をもなす。

算術科

甲組　代數、四則、珠算四則

乙組　算術は高等科程度、珠算四則

丙組　算術は尋常科程度、珠算加減より乘除

唱歌、體操科

文部省認定初等中等唱歌、青年會歌、俗歌の歌詞よきもの、吟詩等、

體操は、小學校程度より更に中等程度に入る、

地方青年は勞働過度、偏重になり易いから、特に血行の順調を計り、身體の硬直を柔らげ、引ては志氣振作、共同精神の養成に資するのである。

地理、歷史

旅行中の見聞の說明、新聞紙上に表れたるもの、芝居、昔語りに表れたる人物の事蹟等に亘る。

理科

今日地方青年には殊に理科の智識を與へ、之等の研究に趣味を持たしむるは極めて大切な事である。

獨逸などでは殊に力を入れてゐるさうである。

簿記

大體の心得があると、金錢を使ふ時、家政の運用に於て、知らず〳〵の間に大なる効をあげてゐるのである。　ましてや實地に應用するについての利益は、

農業、漁業等、以上は、每週一時間宛受ると〳〵やつて行く、あまり時間の

靜かのは、遺憾であるが致し方ない。時には隨意科としてもよい。

自治講話は青年會員の好んで聞くべきもので、初めは青年會の研究より、村治、政治、經濟に入る。町村民としての教育が極めて必要である事言ふまでもない。

一、談話會　談笑會と言ふもおもしろい、質問、討論、餘興を主とし、師弟車座になりて、隔意なく質問を明にし、討論すれば、それを裁判し、娯樂を練り樂しみ、茶菓は各自持參の米、豆を煎り、芋汁を煮るなどもよい。又善行者を互選し、名人を役票するなどもおもしろい。

一、學藝會　閉會の式の夜鄉民の參集を乞ひ、本學期に學習せし結果を發表するのであるが、鄉人ましして父兄は好奇の最負眼をもつてゐるから、多大の趣味を有し、心から感謝し感歎するのである、それは〳〵言ふに言はれぬ、滑稽やら情味やらを經驗するのである、順序としては、

講師來賓の通俗講話、會員の五分間演說（學習した實用的なもの例令ば農業の細かい話、迷信打破の話、狐つき、烏啼、幽靈等、時節の問題など）小學兒童と混りての餘興等。

一、壯丁教育　入營前三週間に一通りの準備をさすので、これは、いづれの地にも、尙武會、在鄉軍人會があることゆゑ、打ち合せるがよいのである。

一、日曜學校　毎日曜又は祭日の夜、兒童、婦人を集め、名士の講話、講師の敎授等を依賴するのである。

一、女子夜學　青年會がしつかりして來れば、是非實行すべき事で、鄉の有志と相談して完全を期するのである、月謝は毎月參錢位の菓子代石油代を納めしむればよい。其他裁縫練習會などを開く。

一、子守教育　どこでも、案外放つて置くが、それだけ悪い風を増長させる、毎日寺の門などへ行つて、遊んでばかり居て、女相當なつまらぬことばかり言ひ合うてゐるのであるから、悪い方へ走るのは無理もない、どころが、これの影響はなか〳〵大きい、ましてや大切な小兒の守り子であるものを。

毎日曜や休み日に、會場に集めるとか、野原に集め、鳴り物で釣つて、歌などから教へる、これだけでも、なか〳〵結果はよい、そしてだん〳〵面白くなるにつれて、他の事を教へるのである。

近頃隨分おもしろく考へて、熱心にやつてゐる人がある。

○人生れて學ばざれば、生れざると同じ、學んで道を知らざると同じ、知つて行ふ能はざれば、知らざると同じ、（貝原益軒）

○博く之を學び、審に之を問ひ、愼みて之を思ひ、明かに之を辨じ、篤く之を行ふ、（中庸）

○一回讀むの價値ある書籍ならば、須らく、之を再讀すべし、（フランクリン）

○人生れながらにして、學べるにあらず、名僧智識と雖も亦人より學びたるなり、（メイロン）

第貳章　鄉風改善

これ青年會が自らを修めるに次での、最も力を盡すべき、美しき事業である、これ程愉快な事業をどうして、放つて置けよう、ましてや熱心で眞面目であれば、あるほど、効が擧るのであるから、

そしてこんな事業を、やつて行けば、どうしても、青年會の品位を保ち、會員が身を修めずばならぬ事となる、自然修まつて來る、ここで、いよ〳〵、自分の幸を引いて鄉の上に、世の上に、ひろめることとなるのである、元よりいろ〳〵な方法手段あるべき筈であるが兎に角、方法よりも熱心

が大切、鄉を思ひ、國を思ふ、赤心が第一である、櫻の花の如き大和魂の血のめぐりめぐつてゐる、わが青年團であるものを、やるがよい、やらねばならぬ、鄉風の改善、家のため鄉のため、國のために。

(一) 風紀取締

これは大きな問題で、次から述べる事柄も皆この中に入るべきものであるが、ここでは特に其特別の方として言ふのである。

地方にはあまり盜火等の事故が尠いから、警察官の職務も自然風紀の改善に重きを置いてゐるのである、それを昔は唯盜人の番のようになつてまことに齒がゆい事であつたが、近來風紀問題が盛になると共にこの方面に力を注ぎ青年男女の品行などについては殊に嚴重に警めらるるのは、よろこばしい事である。

それで青年は、よく注意して、くだらぬ面倒をかけぬよう、それよりも進んで、警官を扶け、奇怪なる風説ある時は、どこまでも其根原を質し、一般のものをも取締り、毎夜當番を定めて、巡羅し、盜火、不品行者等を警むるがよい、又夜中提灯なしで、歩くことを禁ずるがよい、風呂屋や宴會の席で、見苦しい事はどし〳〵注意して排斥し、手に負へぬものは、警察官に處分を乞ふがよい、本人は腹を立てるであらうが、それが本人の幸福であるから遠慮する事はない。

(二) 俗歌改良

鳥や蟲でさへ、歌ひ暮してゐる、猿や蛇や獅子や猫なども音樂に感せずには居ぬ、なかには舞ふもあれば、泣くもあると言ふ。人間が歌を好み音樂に、我れを忘れるも無理はない、まことに美しいことである、羨むべき事である。けれども、それだけに、其影響が大きいから、惡い卑しい、みだらなものが流行ると、其害はなか〳〵激しいのである、どれだけ人を

墮落させたか知れない。ゆゑに舊來のつまらぬ歌は絶やすがよい、そしてそんなものを歌ふことを恥かしく思ふ樣に、聞くものも汚しいと思ふようせねばならぬ、そしてよい歌を流行させるのである、すれば却つて案外な方面から、風紀も改まり、案外な効果を擧るものである。それで、常に面白くて有益な歌を流行させて、つまらぬ歌の頭を押さへてしまはねばならぬ、よい歌がないと、そろ〳〵と惡い歌が頭を擧げてかゝるのである、そして都會で流行する新しい歌があれば、いづれは地方にも流行して來るにちがひないのであるから、先に廻つて其節を改良し其歌詞のよいものばかりを拔いて準備して置くのである。そして講話の要領を短い歌に作つたり、鄕の惡い點を歌で笑つたりするようにせば、おもしろい結果を得るのである。

歌は元より通俗で、女子供にもよくわかるようなもので、節も流行歌を

惡い所をもぢり變へて用ふるのである。小學校を出るものが多くなれば、唱歌軍歌を用ふるがよいよくあることで舊習慣のぬけぬ所であると、唱歌や軍歌を冷かしたり、邪魔扱ひするなぞは、早く改めねばならぬ。

次につまらぬながらの歌作やら、流行歌の拔粹を擧げて見る、

△姉さんかむりの手拭に紺のもぢりと、赤ゆもじ、意氣で貴女や好く似合ふ、いらぬ、おめかし（おやつし）やめなさい、トコトツトト、

△花は十五の春淺く、立てし男子が一念は、學ならずむは、死するとも、再び家に歸るまじ、トコトツトトー、

△雪の白濱夢に見て、忍ぶ苦學の五年間、今更病氣に罹ろとはあはれ血に泣く不如歸、トコトツトトー、

△白濱里の夕まぐれ、磯邊に寄する波靜か、千々見風しに身を吹かせ、思

に沈む影清し、トコトツトトー、
△たとへ此身は果つるとも、更に厭ひはせぬけれど、受けた世間の親切
を無にする事の口惜しさ、トコトツトトー、
△立てし男子が初一念、岩をも徹す桑の弓今に病魔を追ひ拂ひ、うつよ
乾坤一局棋トコトツトトー、

(三)　惡業禁止

猫に鰹節の番をさせる事は、愚の骨頂であることは誰れでも知つてゐる筈であるが、青年に、いろ〳〵な誘ひ惑はすものを近附けて置くことは尚更危險である、それを默つて放つて置いて、そして一方では、嚴しい事ばかり言ふて責めるなどはあまりに有志者の愚を表し、青年に對しては慘酷なことである。青年會員の中から一人、なまけ者が出でてへ、いろ〳〵な方面に甚しき妨げをなすものをましてや、一般に流行り出しでもすれば、手の附けやうはないのである、これは一時も捨て置け
ず早く〳〵社會の制裁力で禁止せねばならぬ、又當來からの事情でとうしても、禁じられないものは、種々の取締に注意し、本人に虚偽し警察の取締を乞ふがよい。
こんなものが、繁昌するのは、取りも直さず、得意先があるからのことであるまして堂々たる青年會のある所を知りながら、平氣で新しくはじめ出すなどは、あまりに青年會を馬鹿にした話である、しかし本人とて、生活のためが半分、いや全體かも知れねば、よく本人の事情を考へて、温和な情ある方法を採らねばならぬ、あまり無理をして、つまらぬ大事を起しては相ならぬのである。
遠州濱名郡の村櫛村では、村方酒專賣法と云ふを設けて、其純益金を教育費に充てゐ居るさうであるが、節酒といふことが、一種の矯風事業であ

る上に、之が費用の一部を教育費に充つると言ふのであるから、世に言ふ、一擧兩得である。

三河の寶飯郡大塚村字赤根では、禁酒部落と言はれてゐる、其わけは、如何なる場合でも、二升の酒を買つたものは區長に還擧せぬと言ふ不文律即ち誰が定めたともなく出來た約束が定まつてゐて、新年宴會でも、祭典でも、或は日待、軍人の送迎でも酒の入用ある時は飲んだものと見て費用を徴集し、悉く共同貯金に積み立つと言ふ事である、特に振る舞ひ酒は飲むことが出來ぬ、之を飲むことが出來ぬ、之を飲んで、よい氣になるが如きは、意氣地なしとしてゐるので、酒を振り舞ふ者もなく、飲む者もないと言ふことである、凡そ百戸の部落であるが、よく協同一致の出來るところで、日掛金もやつて居れば、火災に對する共同救護も出來るようになつてゐる而も何れも規約の條文なくて、ずん〳〵實行が出來るさうであるが、これ酒を飲まぬ功德と言ふてよいのである。

酒にしても、烟草にしても、自然に詰を減らすやうに出來る、青年會の事業として實捌き又は代理店を定めて實捌かしめ、會員に限らず、こゝに於て買ふべきこと、何錢以上の品は買らぬ事とする、と言ふ方法も良かろうと思ふ。

(四)　敬神尊佛

昔から、神佛を信仰せぬ國は、どうしても亡び易く、永續きはしてゐない、ましてや信仰の確かりしてゐない人は哀れなものである。そんなものは、池の上に漂ふ藻の如く、日夜安心といふものがない、いつも〳〵迷ひ迷つて、自分で自分を苦しめてゐるのである。近頃のハイカラとか言ふ生意氣な人々が吹聽り顏に、人の信仰を馬鹿にしてゐる、そのために、折角の信仰を、めちや〳〵にせられて苦しんでゐるものが少くない、

近頃不都合千萬な事である。深い議論はこゝでするわけには行かぬが、神や佛がさう、易々と目に見へたり、わかつてたまるものではない、それを深くも知らず、考へもせぬで、只老人の昔風な眞似をするのを、妙に考へて、ちよつと生噛りした所では、神佛が無いように見へるものである。から、人から受け賣りの小理窟を言ふて、物識り顏するなどとは、あまりに淺墓な、且亂暴な事である。人々の考と言ふものは、人相應に出來てゐて、輕々しく左右する事は出來ない、まして神が有難いと信じてゐるものはそれでよし、佛樣のお加護があると信じてゐるものはそれでよし、畢竟、人は信仰で生きてゐる、小さな事は、人々のこの世に生活してゆくための、朝夕の得心はみな信用のおかげ、働くも、ねむるも、みな信心である、それが大きくしたのが、神佛の信仰である、己れには信仰なしと言ふは、考への足らぬ言ひ方である。それを生半解のクリスト教や、佛教や

ざては、科學の入門を知つてゐる位で、人の信仰を邪魔するなどとは、不德も甚しいと言はねばならぬ。

何處に行つても、氏神樣がある、寺がある、青年會員はよろこの道理を辨へて神社佛閣を大切にし、毎月一定の大掃除するとか、燈明を點ずるとか、祭典を正しく擧行するとか、こんな所で修養するとかしてゆけば、自ら心が落ち付き、確かな青年會となるばかりでなく、どれだけ世を益するか知れぬ。お寺は老人の參るところにかぎつてゐるように考へられて居たのは、坊さんも惡いのでもあるが殘念な事であつた。夫りや嫁姑酷めをせぬやう、樂しい往生をするようとて、參るもよいけれども、老先短い人であつて、今更の俄か信心が、どれだけの効があらう。むしろ先の永い青年が盛んに、行き說教を聽いて人の道を知り、身を修め行末永い間を安らかな、樂しい暮をして、世間のためにもなつて行くことが肝要

であるから、青年會は振つて手本を示し、女小兒より戸主を導かねばならぬ。

(五) 先賢故人の追敬

これは前のところで言ふべきことかも知れぬ、げれども特にこゝで申すのである、祖先を崇拜して其德を讃するは、日本國民の特色であるから、ます〳〵この美德を發揚せねばならぬ。

皇室お自ら皇祖皇宗をお祭りになつて、模範を垂れ給ひ、上は伊勢大廟より國幣、官幣の神社は到る處に鎭座せられてある、鄕風改善の任務ある青年會員は其近所に神社はなくとも、古聖賢忠臣義士の紀念日を祭り、鄕の先輩名士及會員の故人を追弔して其德を偲ばねばならぬ。して鄕人の葬儀には熱心弔悼の意を致すべきである。

記念祭行事

一　月

一日　四方拜、豐太閤誕生日
五日　小楠公戰死
十四日　新島襄誕生
廿八日　大探檢家スタンレー誕生

二　月

二日　福澤諭吉逝去
十一日　紀元節
十六日　日蓮上人誕生
廿五日　菅公薨去

三　月

三日　櫻田門の變
十三日　源頼朝薨去
廿五日　菅公左遷
三十日　孝明天皇祭

四　月

四日　赤穗義士賜死
十五日　涅槃會
廿二日　ワシントン誕生
廿一日　弘法大師入定

廿八日　畫聖ラファエル誕生

四月

一日　親鸞上人誕生
十七日　徳川家康薨去
廿九日　皇孫迪宮殿下御誕生

五月

六日　靖國神社大祭、ソクラテス誕生
廿三日　坂上田村麿薨去
廿七日　バルチック艦隊全滅

六月

二日　本能寺の戰
十日　徳川光圀誕生
十九日　アレキサンドル大王誕生
廿四日　加藤清正逝去

七月

五日　セシルローズ誕生
十三日　盂蘭盆會(鄉人追弔)
廿八日　トラファルガア海戰

八月

六日　詩宗テニソン誕生
十五日　八幡祭

九月

九日　トルストイ誕生
廿五日　和氣清麿左遷
廿一日　春季皇靈祭

三日　神武天皇祭
二十日　ナポレオン誕生
八日　釋尊降誕

十四日　大久保利通逝去
廿五日　楠正成戰死
廿八日　地久節、曾我兄弟仇討

四日　最澄上人遷化
十一日　ペートル大帝誕生
廿一日　林子平歿す
三十日　大祓式

十一日　佐久間象山逝去
廿七日　熊澤蕃山逝去

十三日　豐太閤薨去
卅一日　皇太子殿下御誕生

廿三日　賴山陽逝去

十　月

七　日　賴三樹三郎橋本左內刑死　十二日　芭蕉逝去
十三日　日蓮上人忌辰　十六日　藤原鎌足薨去
十七日　神嘗祭　三十日　敎育勅語下賜
十三日　戊申詔書下賜

十一月

三　日　天長節　五　日　北白川宮薨去
廿三日　新嘗祭　廿八日　親鸞上人入寂

十二月

廿五日　クリスマス祭

(六)　祭典餘興

まづ祭典のことを申して置いたが、餘興について言ふ必要もある、四季折々の祭を正しく、賑やかにやつて行く事は極めて肝要である。ましてて遊ぶことの少い地方では、祭を樂しみにすること、都會人の想像以上で、これがため、遊ぶと、働くとの、きまりもよくつき、人々の交際も圓くゆくのである。けれども、兎もすると、賑はしの方法が、極端になり、みだらに、なり易い、また從來目にすると、折角の祭が祭らしくなくなるのである。

どうしても、青年會が、中心となつて、出來るだけ面白く、且害のないものを賑しくやるがよい、昔流のものでもよい、又つまらぬものでも、改良すれば立派にやつて行けるはずである、芝居などもあまり、賞めた事ではないが、それでも他に何もない時には、其害を豫め妨いでかゝつて、やつて見るもよかろう。次にたび〳〵やつて結果のよかつたのを言ふて見よう。

通俗講話會(演藝會)

時間　祭日、夕方より午後十一時まで

會場　鎭守堂(有志の家、青年會場)

番組

一、開會の辭　會長

二、君が代　會員一同(舞臺に整列して)

三、戊申詔書奉讀　會長又は小學校長、敎師

四、青年會歌　會員一同(舞臺に整列して)

五、劍舞　會員

六、講話　來賓

七、尺八等の合奏　來賓

八、蓄音器、ニッカ等

九、講話　來賓

一〇、義太夫、劍舞、獨唱、等

一一、講話　來賓

一二、擊劍、柔道試合、蓄音器等

一三、一幕芝居、ニッカ、踊等

一四、青年會歌、萬歲三唱

一五、閉會の辭　副會長

餘興は會員及鄕の有志の出演を乞ふがよい。

樣數　各家より莚一枚宛を集めて數ふ、棧敷料等を謝絕するがよい。

男子席に兩分すれば、非常に都合がよい。

裝飾　なるたけ費用をかけず、立派にするの主出來るだけ幕を借り集め、檜葉杉葉にて、柱石段を飾るのである。

準備　學業を休まぬやうに、餘程前から準備するのである。

其他の設備　風紀係、接待係、樂隊係がうまく活動するのである、客の滿足について充分つくすのである。

整頓　開會閉會を正しくし、一般に儀義を守るよう、又幕合がだら〳〵せぬようにするので、少しく注意すれば、主客よく落ちつきて、決して惡評したり、閉會前に立つたりはせないと思ふ、もしあればそれは、主人側がだらしないで、ふわ〳〵するからである。

(七)　葬具調整

青年會が進んで、葬具の調整をやつたら、どんなに世間の人が喜ぶか知れぬ、決してそのため品位を落しはせぬ。死と言ふものは世の中の最も悲しい時である、まことに同情すべき事である、ところが世間には案外情義がうすく、生れた時や、祝には喜んで出るが、葬式に進んで出るものは少い、それがために、この永い〳〵別れの際に、充分の心を盡すことが出來ないで、無慘にも乞食などには任してしまふものが多い、又人の死と言へば、最も嫌やなことであるから、人々が近づく事を氣味惡く思ふも、無理はない、進んで出るではない自分の番になつてから、悲しい淋しい思をせぬように義理をつくしに出るのである、それゆゑ多くは、うはのそらで送つてゐる、埋葬なども、亂暴な扱ひをする、まことに無慚である。

青年會が常々修養して、死と言ふ問題に、相當な覺悟を持つて、死人に同情し、極めて大膽に極めて、嚴肅に取扱ひ、葬具も今迄の放つちらかしとちがつて、良く手入をして、祭具の如くし、貧富の別なく、世話したならば、其家人の喜びはどんなであらう、そして自然どうしても、青年會員の大なる修養が必要になつて來るから、幸福の基をなすはずである。

しかしよく考へて、やるならば、やるよう、眞面目でせぬと、なまけ半分でやれば、乞食非人と變りなく、却つて人に蔑られ、當然の樣に思はれるのであらう、それでは却つてつまらぬことである、なにも品位をもつとて、威張つて、恩を着せるではないが、なほ同情ある赤心をもつてやれと言ふのである、すれば世人は多大の感謝と敬意を拂ふであらう。

(八) 尙武會

近來青年の氣風が惰弱になつて到る處不評判である、まさか昔の儘をやつて居れとも言ふのでもないが、どうしてもこんな傾向になり易い、これでは日本の前途も心細いわけで、人々が心配するも無理はない、今では、つまりボイカラの服きちがひをしてゐるのである、上品に濟ませ出來るのを、美しく女らしくせよと考へてゐるのである、だから、不用の髭を延ばしたり、油をつけたり、一度でよい風呂へ三度もはいつたりするのである、どれだけ不經濟で、心も身體も弱くなつて、不幸の基をなすか知れないのである。

まして小さい身體をしてゐる、日本人はそれだけの、準備がなくては、白人種とは爭はれない。

これは娛樂の中で述べる所のものを、參照して貰ひたい、つまり在鄕軍人會、村尙武會もあり、武德會、體育會、講道館(會長嘉納氏)なども追々整頓して來た今日であるから、種々相當の連絡を採つて、進んでゆき、大和民族の大特長である、尙武勇健の氣象を鄕中に滿たさねばならぬ、女子などには、特に注意して昔あつた如き、日本女子の特色を再び現したいものである。火事だ洪水だと聞いて、ぶる〳〵震つてゐるようではいかぬ。

(九) 仲裁、制裁

何れの鄕に行つても、喧嘩と、憎くまれものは、なか〳〵多い、みな我儘が

もとである、こんなものは必ず義理人情の考がうすくして、世間の邪魔になる事は一通りではない、ところが喧嘩は損嘩の里諺にもれず、皆其根を洗つて見れば、馬鹿〳〵しくて、話にならぬ、夫れを、つまらぬ情に激して、盲目となりて、角突き合ひに、日も足らず、各自のふためは元よりの事世間の人にまで、迷惑をかけて、なんとも思つてゐないのであるから、放つてはおけない筈である。

ところが一旦喧嘩したものは、どうでも意地づくになつて、後悔しながら、なほ一層やり通すので、仲裁は時の氏神の出て來るのを望んでゐるのである、ところが戸主の方では、いろ〳〵と義理があつて、手出し兼ぬる事もある、そこで青年會が大膽に公平に、眞面目に無邪氣に出たら、これに越したものはないのである、ある青年會は二百年にも亘つた喧嘩を納めたと言ふさへある、まして二年三年の納めをつけて、信用を加へた青年會はいくらもあるのである。

注意と言ふても、いろ〳〵あるがまづ、

一、其人々の不幸を考へ、心から氣の毒であると思つて、鄕のため世のためにと、どこまでも、やり通す覺悟がなくてはならぬ。

一、公明正大の考を以て、爭の本源をたしかめ、一旦採決したら少々の犧牲などに目をくれてはならぬ、又決して後に種の殘るような事をせぬよう、中途で放つてしまふなどは、却つて害あつて益はないのである。

一、報酬や感謝をあてにしてゐたらば、それこそ失敗するにちがひない、只青年會の地位を正しく保つのである。

一、納まつた後も常に心を用ひて、和合の方便をとり、兩者の接近をはからねばならぬ。

また中には隨分、致し方のないのもあらう、そんな時には、其人のためでもあるから、相當の制裁を加へるがよい、もつとも、親が子を思ふ如き考でないと、隨分失敗することがあるから、注意せねばならぬ。

世の中に世間の交際を絶たれた程、心淋しく、情ないものはない、隨分太いものは、平氣な顏をしてゐるけれど、腹中は決してさうではないのであるべき筈である。もし制裁を與へたならば、常に其人の後悔するよう仕向けねばならぬ、後悔したらば、都合よき傳手を與へて、一日も早く善道に入らねばならぬ。

所によると、立派な有志者が心變りして、萬事の邪魔をしたために、折角出來上つた立派な村が亂れてしまつた例もあるし、小作人が地主に反抗し、地主が小作人を苦しむるなどの例が尠くないのである。

制裁は天の理である、天罰である、世のためである、自分のためであると言ふことを折のある毎に一般に呑み込ませるよう、そのかはり、制裁の筋道を極めて明白に、其方法を正しく精神上に重きを置かねばならぬ。

(十) 養老會

耆老會、敬老會とも言ふ、何を言ふても、老人と言へば、もはや老先き短い心細い人々である。身體は心のまゝにならず、仕事はなし、世間は合手にせないばかりか厄介扱ひをする、それに日に月に進歩する世の中とて、人々の働くことが、自分等の考へ樣とは違ふてどうなる事やらさつぱりわからぬ、嫁いぢめしたり、愚痴をこぼしたりするのも、心の中を推し側つて見れば、哀れにも、氣の毒である。又一方から見れば若い時からこのかた、世の荒浪の中を苦勞して來て、鄕のため國のために相當の功勞を盡した人々でもあるからその功勞を思ひ其實際の生き學問を思へば、尊敬せずばなるまい。それを思に着せては愛想もなくなるが

後から生れた若い者の方では、それ相當の禮を盡すのが人の道である、情の花である。

これ等を考へて見ると、老人に對して、出來るだけの慰安を與へて、樂しい晩年を送らせ、長幼の禮儀を正しくし、且永い間の經驗ばなしを話してもらふたり、尋ねたりすることは、まことに肝要であるは言ふまでもないのである。又老人が青年と交れば、自然心が若やいでくるし、青年の方でも自ら心が落ち着いて、輕はづみをせぬようになるわけである。これ等のために、便宜のあるたびに、老人の出席を乞ひ、又は年に一回なり、二回なり、鄉中の老人を招待して慰安の集りを開くがよいのである。それについての注意をざつと言へば、

一、よく老人の趣好を考へて、萬事に心を盡し、心置きなく樂しませねばならぬ。

一、單純でよくわかり退屈をおこさぬ、ゆる〳〵とした、面白いものでなければ、かへつて老人を嫌やがらせる。

一、こんな會になれぬ老人が多いのであるから、案內と取扱ひを丁寧にせぬと、おそろしいような、不安心な、五里霧中な、考を起させる、中には席が高いとて心配したり、携へものが紛失しはすまいかと氣遣つり演說を叱られるように思つたり、日暮を案じたりするのである。

一、慰めの方法としては、酒肴、名士の說敎、音樂、小兒の唱歌や遊戲、簡單な所作事、簡單な地理、理科の說明(文明を知らせる)懇談の便宜、上品な方では俳諧の交換、などである。

一、時間は出來るだけ短くする、そしていつまでも同じ事を繰りかへしてはならぬ。

一、紀念品を分配せられた喜びは、何にたとへるものがないさうで、それ

が毎年であれば、その樂しみ心持はたいしたものであるさうな、子供とかはりはない、どんな人々でもおなじであるさうな。

(十一)　補育會

子供は世の寶、國の寶、家の寶、よい子供が多ければ、其世の中は、賑しい、子供の狀で其國の行末も知れると言ふ、まして家庭では子供こそ樂しみの中心で、一家團欒の天使である。それに子供ほど罪のないものはないい、身分の高下で、兎角するは偲びないことである。

斯樣に考へて來れば、良い產婆を鄉に置くように力め、又無理な育て方甘い育て方をするようなことを、つとめて嫌つて、忠告もすれば、それとはなしに排斥もする、そして貧しい人には相當の手當をなし、時々子供を集めて、有益に愉快に遊ばすようにすれば、父母も喜び、小さい子供の時から共同の精神を養ひ、長幼の禮を辨へさせ、引いては愛鄉の精神を堅くさせることとなるのである、青年會は意外の感謝をうけ、又おもしろくもあり、惡遊びする子供もなくなることであらう。

(十二)　團欒會

いくら理窟を並べたとて、多數の人の心を左右する事は六ケ敷い、それよりも、人氣に投じて群集の心理で、實際にあたつて、結んだ實が、最も効がある。それゆゑ、機會のある毎に、鄉の休み、祭禮、祝典、正月、盆會等を利用して、會場なり個人の家なり、神社の境内なり、寺院なり、學校なりに相當の設備をして、一鄉の人々を集め、家内のように有益な、愉快な催しをするので、昔からあることであれば、なるたけ改良して保存して行きたいものである。

(十三)　公　園

景色がよく、愉快に遊ぶことの出來る場所を開き、手入を爲し、何人にも、

自由に遊ばせるので、都會のような澤山な人が住んでゐて、近くに野山がない、年中野山を見ぬ人さへある、それでゐて朝から、塵埃を浴びてゐる、眼耳を無理に使つてゐる人々のためには、是非共、大仕掛な公園の設備が要るのであるが、田舍では、美しい山水、清らかな空氣の中に往んでゐるのであるから、人のこさへた、つまらぬものでない、天然自然の大公園の中で暮してゐるわけである。ゆゑに餘計な手入をして却つて、下品にした上、費用を捨てぬでよい、たゞ道を開き、井戸を掘り、草花を植ゑ、個人に交渉して、其所有地を開放するようにする、堤防の上に櫻を植ゑたり、共有地を通る人は、必ず草花を途中で引き抜いて、共有地に投けて置くとか、子供に草花を與へて、共有地に植ゑて遊ばせると言ふようにすればよいのである。保安林はなほさら鎭守の森などを大切にし、又は櫻などを伐るを禁じ、眺めのよいところにある樹を保存するようにするので、斯樣にすれば、鄕の人々の心は自ら愉快となり、自ら立派になり、身姿も自ら改まり、酒色の外の樂しみを覺え、風紀改善の上に、意想外の効果を見るはづである。綠肥の栽培のようなものは一擧兩得である。

(十四)　善行表彰

世が進んで來るほど人が悧巧になつて、言ふ事ばかりは、うまいもので頼母しく聞こえるけれどもそれと反對に昔から傳つて來た、人情の花が段々滅つて來る、あながち滅るでもあるまい、人の數が澤山出來る、割合からは失張相當にあるであらう。しかし人が悧巧になると自分の事を考へてうまくぬける、なかなか〳〵人の事など、いらぬお世話だ位に考へる、よく〳〵考へて見ると、世の中の人の心が案外輕く眞面目でないようである、あれほど口では、うまく言つて、いざとなると、知らぬ顏であ

る、この薄情の世の中に暮しにくい世の中に、いろ〳〵な迷ひ道に入らず人の義理を守り、その上自分の身を忘れて世間のために盡す人があれば、それはどんな人であらう、戰に出て鐵砲の音を聞いて、膽玉がすわり、まゝよ大膽死ぬる覺悟で敵の中に飛び込むは易いかも知れぬ。けれども人の賴みもせぬに、人の情が押へ切れず、我が身を忘れて人を助け、鄕を助けることは六ケ敷、ましてや永い年月の艱難苦勞を忍び忍んで鄕のため家のため夫のため、親のためにつくすことは、どんなに、つらひ事であらう、世間では、こんな人の賞められるゝを見て、なにあれ位のことゝか、名譽心でとか、輕くとつてしまふがあまりに、人を愚にした、いや己れを見限つた考であるまいか、初めから賞められることをあてにして何が出來るものか、そんなものは、なか〳〵人が賞めない、そこで失望して止めてしまふ、ところが人に賞められるゝ位のものは、そんな人に賞められるゝ位の事を、あてにしてはゐぬ、つまらぬ事であると思つてゐよう。それよりも、胸の中の情の火が燃えに燃えて、押へ切れぬのである、それでこそ、火の中、水の中の苦しみを忍んで行くのである、人はその身でやつて見れば、他人の苦勞がわかるものではない。

まことに尊むべきは、この人の情の花となる人々である、それでこそ、このような人々が出ればこそ、世間の模範となり、目を覺まして、人の體面を保ち、鳥獸に劣らぬ月日を送つて、世の中を圓く、行かせてゐると申しても決して過當ではない。こんな人々を漏らさず見出して、表彰し、又は特に慰勞し、世のため、國のために、感謝せねばならぬ、すれば自然に世の勵ましとなり、其人にしても益々行をつゝしみて立派な人となるのである、又青年會に於ては斯かる人々は益々行をつゝしみ、身を誤らぬよう、萬事に適當な世話をして行く事が肝要である、若し斯かる人の

つた時は、次のような處置を正しく採つて行かねばならぬ、而し注意に注意して、不公平に陷らぬよう、又濫りに賞して、効果をなくせぬようにせねばならぬ。伊豆の稻取村では、青年會員は戸主會で表彰し、處女會員は母の會で表彰し、戸主、母の會員は、養老會の席上で表彰することになつてゐて、善行者は、あらゆる場合、尊敬し、便宜を與へてゐるさうで、處女會員の如きは、非常に成績よく、遠く他府縣の地位ある家より、財產、門地、容貌を問はず、只善行章を有する處女を入嫁させたしと申し込むと言ふ有樣で、又一旦婚嫁するとなると、母の會が嫁となるべき處女を鞭達し、願はん許りにして、自重せしめるさうである。又岐阜縣土岐郡曾木村の小會木某女が貞婦、孝女の鑑として、賞勳局、郡長等より表彰せられし時同村よりは、金子壹百圓、孝子田、孝子林等を贈與したことは極めて近い例である、これが全國の人心を刺撃したことはたいしたもので

あつたらうと思ふ。

一、善行者ありたる時は、青年會より感謝狀及記念品、寫眞等を贈る、表彰記錄を綴る。

二、又は總代に上申し、町村長に上申して表彰を乞ふ、

表彰例

甲◎賞（黃色の徽章及金拾圓以上又は之と同等の記念品を贈る）人格德行最も高き人。

乙◎賞（白色の徽章及金五圓以上又は之と同等の記念品を贈る）模範的人物。

丙◎賞（綠色の徽章及金一圓以上又は之と同等の記念品を贈る）人命救助等非常事變の義人。

丁◎賞（赤色の徽章及金五拾錢以上又は之と同等の記念品を贈る）

普通善行者。

(十五)　戸主、母、處女會

これはくだ〳〵しく言はぬでもよいが、もはやわかつてゐる筈である、鄉の事にしても、青年の働くべきところは、分がある、その他は戸主のことは戸主、母のことは母、處女のことは處女で自ら治むべきことである、又この四つのものが、うま〳〵一致して行くように、機關が出來てゐねば、決してうまくゆかぬ、それであるから一日も早く、この名の會を成立たしめねばならぬが、矢張青年會が、熱心に世話したならば都合がよい、殊に引込主義の婦女のことなぞは、なか〳〵骨が折れるどうしても、戸主の贊同を得て、上流の婦人を贊成させて、骨子（コッシ）として行かねばうまくゆかぬ。これについて言へば限りのない事であるからこれにして置かう。

(十六)　納稅厲行

よくある事であるが、納むべき稅金に就て、いろ〳〵な苦情を並べ、其上平氣で滯納してゐるなどは、甚しい心得違ひではあるまいか、ましてや相當の資產あるものが、而も其利子に目が眩んでとは、あまりに情けないではないか。深い理屈は、まづおいて稅金は決して寄附のように人のために出すものではない、鄉を治め國を治めるため、つまり國民の幸福のために、是非共要る費用である、それゆゑ決して、餘分の金は集めない、每年の終りに、其年の費用から推して、翌年度の費用を而も町村長、議員、大臣、國會議員が議して、見積を決定し、國民に割りあてるのである、ゆゑに稅金は其期日までに納むべきは、もとより、何はさて置いても速く納むべきもの、考へてゐる人は、稅券を受取るや押し戴き、神佛に感謝して、安らけき世を喜び、すぐ納めてしまふと言ふさへある。もし稅金が納まらぬと、役所では、非常なる不都合を感じてつまらぬ、遣り繰りをなし、

多く手數と費用をかけねばならぬのである。ここをよく考へて、常に其義務を尚ばしめ、又貧しき人は實際に苦しんでゐるのであるから、豫め納稅組合を設けて、安らかに正しく義務を果すことの出來るように、はからねばならぬ、今日到る處納稅組合が盛んに行はれ、よい成績をあげてゐる。

(十七)　兵役奬勵

たび〳〵の外國との戰爭に、我が帝國が大勝をなし、世界の一等國であると、大きな顏の出來るのは、維新以來目覺ましい、文明の進歩にもよるが、第一原因は實に、帝國陸海軍人が强銳であつたによる、萬國無比の日本魂で鍛へ上げた、働きによるのである。身體から言ふたならば、露、清の兵は我が兵の二人がけもあらう、けれども力ばかりでは戰は出來なかつた、最も尚むべき精神こそ、最上の力であつた、この日本魂即ち忠君愛國の大精神が、こり固つて軍人の行動に表れ、國民の後援に表れ、人間業とも思へぬ事をどし〳〵やつて、外國人をして舌を巻かしめたのである。およそ力のないものは、他より侮られる、支那の如き我が國よりも數十倍の國を持ちながら、あの通り馬鹿になつてゐるではないか、それであるから、世界各國が力をつけよう、力をつけようとして、いろ〳〵に考へてゐるのは、無理はない、この激しい世の中とて、少しにても力が落ちようものなら、すぐつけ込まれて、商業、學術の上まで、障害を受けるのである、力をつけるのは、まづ何よりも軍備である、このために師團を增し、軍艦を增し、戰術を究め、軍器の改造等、どの國でも實に言ふに言はれぬ、苦勞をしてゐるのである。

陸海軍の力を養ふのは決して戰爭する爲めではない、戰爭を妨ぐためである、戰爭は必ず、一方で勝つ見込があるから、はじめるので、決して目

あてなくしてするものではない、それゆゑ互に力があつて、油斷せずに居たならば、戰爭したくとも出來ぬのである。

今や我が國は最大切な時を控へてゐる、日露戰爭の結果を見て感嘆して、我れを一等國として持ち上げた諸外國は更に、ねたましいよりも恐ろしいと言ふ考を以て、我を迎へてゐるので、我國民たるものは油斷が出來ないのである、ましてや萬國無比の最も神聖な皇室を載いてゐるのであるから、ます〳〵忠君愛國の精神を發揚して、國運の隆盛をはからねばならぬ。

その近道は他にない、つまらぬ理窟を並べるよりも、各の義務を滿足に果して行けば、自ら事は出來上る、其義務の中最大いなるものを、納稅義務、國民教育、徴兵義務の三大義務である、ところが、青年は國民教育の時期はすんでゐる、納稅の義務は、戸主となつてから果すべきものである、

即ち徴兵の義務こそ、青年の務めである、苟も帝國臣民にして、國運の發展を希ふものが、この名譽ある義務を果さぬでどうしようか。まして徴兵檢査に合格せぬものは、一人前の青年でない、不具者である。夫れゆゑ男子と生れたからには、この名譽ある檢査に合格し、而して帝國軍隊の一員として、聯隊旗の下に、男らしい規律正しい、生活を送り、保險付の身體を仕上げねばならぬ、まことに國家の干城、全國民の守りである、青年の名譽ある代表者である。これを考へないで、兵役を厭ふとは、何と言ふ愚な事であらう、又現今の青年が軍隊生活を恐れるなどとは、あまりに情ない考である。そんな意氣地なし、面汚しは、どし〳〵目に物の見せてやらねば、本人の目はさめぬ。

斯樣に考へて見ると自ら、徴兵に進んで行くべきはずである、青年會は尚武の精神と相待ちて、この大精神を養成し、弱音を吐くものは、どしど

し制裁を加へても差支へない、そのためである。又名譽ある入營者ある時は、充分に感謝し、奬勵して其行を盛にして、あくまで入營者をして自重せしめ、入營の後も常に慰問し奬勵して其成績を完ふせしめねばならぬ彼等が青年團より、慰問狀を受けし時の喜びと誇とは、何にたとへるものなしであるさうな。

又退營軍人はよく自重して、後進に軍隊生活を說き、軍人精神を鼓舞奬勵して、其本分を盡さねばならぬ、しかし在鄉軍人が軍人顏するほど、下品で嫌やなものはない、これ自らの顏に泥をぬるわけである、優しく謙遜でなければ光は自ら發して、どんなに美しく床しく見ゆることであらう。

又入營軍人の家族を慰問し、種々の便宜をはかつて、決して入營に不服を言はせぬよう、心配させぬよう、殊に最も同情すべき戰病死軍人遺族に對しては、あらゆる方法を盡して、慰問の實を擧げねばならぬ。

(十八)　教育普及

今更に學問の必要を管々しく說くまでもないが、昔のように學問の道も開けず、又學問なしでも、平氣で世渡りの出來た頃とは違ひ、今では其進歩驚くばかり、日に月に新しい研究や、書籍がどし〳〵增して來るので、一日も安閑としてはおられぬ、今でこそ昔育ちの人が多くて、學問をせないでも、人並位で通る事もあらう、つまり無學の仲間があるから心強い、又少し學問があれは、意張られるけれど、もうここ十年も經つたならは、無學の昔流の人は追々、死んでしまい、そのかはりに、中學より大學を出たものが、掃くほど出來る、その時の世間並は、今頃どころではないその時になつて、人並よりは取り殘されて後悔したとてもう遲いのである。

又帝國の上から言ふても同じこと、そんなつまらぬものが多ければ、國民全體の智德が低いから、外國と比べて劣る、それだけ國の勢が劣るわけであるから、放つては置けぬ、そこで國民教育の義務を負はしたのである、まことに國民教育こそ、國を盛んにし、臣民の幸福の種である、それでこそ、各町村が納稅の半分までも教育費として費してある、又文部省では、數十萬の費用をかけて、種々の方法をとつてあるので、あの小學校の一學科でも決して、みだりに設けたものではない、多く學者と經驗家とが集つて、議して是非必要である、これ〳〵の利益があると言ふのではじめて設けたので、そのために、どれ丈の手數や費用をかけてあるかは知れない。それを淺薄な考で早合點して、おれの子供には不似合だなどと、苦情を言ふのはあまりに情ないわけである。

斯樣に考へて見ると、たとへ家の都合が惡くても、出來るだけの學問はさせて置かねばならぬ、又青年會の如きは、只々親切さへあれば、出來ることであるから、折角入れた、教育費を有效にするため、且つは帝國のため、其人々のために、あらゆる方法を盡して國民教育の普及をはからねばならぬ。

又教育の有效は教師によると言はねばならぬ、兒童がよく教師を尊敬して其教へ訓しを守つて行けば、自ら立派な人となるわけであるから、良き教師を招じ、之を尊敬して模範を示し、家庭にも注意し且學校と家庭との聯絡を扶け缺席兒童の督促をなし、などするようにしたいものである。

ここに一つの美しき例話を加へて置こう、それは今中央政府で、名高い人についての話である、その人が東北の某縣知事をしてゐて、なか〳〵評判がよかつたことがある、ある時其子息の某が小學校から歸つて父

なる人に尋ねるには、「先生とお父さんとは、どちらが豪いでしようか」と出たときに、父なる知事は早速極めて眞面目に、「それは先生がづつと豪いよ」と答へられた、これを聞いた子息は如何にも感じた樣であつたさうなが、其後はます〳〵教師の敎を守つて、優秀兒となつたさうである。なんと賢明な而も美しい話ではないか、なまなかの門地や學問を鼻にかけて、却つて其最愛の子供を誤る人々はよく考へねばならぬことではあるまいか。

(十九)　義務厲行

義務々々と言ふ事は、まだ耳新しいためにか、どうもよくは響かぬらしい、何となく自分の身を切つて、人の爲にするように思ふから、嫌ひたくなる、避けたくなる、これもとより、甚しい誤りである、義務とは、自分のためになることのために、拂ふところの禮である、義理である、只で品物を買はふと希ふ人はあるまい、遊んでゐて米麥を作ろうと希ふ人はあるまい、それでゐて義務を果さぬで、自分のためにしようとは、あまり愚な考である。千里の堤も蟻の一つの穴から崩れてしまふ、只一人の不義理がどれだけ人々の迷惑になるか、悪い結果を及ぼすか、知れない。青年會の如きは進んで、この理を辨へて、世を導き、自ら模範を示し、世の中を圓く進ませねばならぬ。

(二十)　鄕土史編纂

これは、ここに說くことは如何かと思ふけれど、兎に角制合に其範圍が廣く、案外の効果のあるものである、つまり鄕土の昔よりの變遷をしらべて纏めるのであつて、なか〳〵おもしろく且有益な仕事である、青年會の共同事業として、各、方を盡して地理を考へ、未開の山野を探檢して世に紹介し、且其史蹟を調査し、又は神社、佛閣、古墳等を調査し、深い研究

は其道の學者に問ひ、ことに鄉土史編纂を企ふするのである。意外の發見をして、學界に貢献することもあらうし、青年會員の樂しみにもなる、學術の研究にもなる、深い考へをも養ふ、祖先の遺風もわかる、今迄無意味でおつた、野や山が言ふに言はれぬ、深い意味のあるものとなつて、朝な夕なに追想の種となる、修養の資料となる、そして人々をして愛鄉の念を、ます〳〵深からしめて、一鄉發展の基をなすのである。

第參章　公益開發

(一)　揭示板、天氣豫報、新聞

文字の讀めないものはもとよりのこと、家業の忙しいため、新聞、雜誌を讀むことが出來ぬで、其日其日の出來事を知らず、世の中の事も知らぬで月日を過すばかりでなく、そのために、不都合を來すことは決して、少くはないのである、これ等の不便を救ひ、更に產業のため、風敎のため、文化のために揭示板、天氣豫報、新聞等を應用するのである。

揭示板は、最も人目の集り易い場所に雨風のしのぎを確りして黑板なり、紙を貼るなりして、新聞雜誌に顯はれたる、重なる出來事、時候天候、人事、集會等社會の出來事及日常知らねばならぬ、事項を極めて平易に、繪などを添へて、揭示するのである。

天氣豫報は町村役場等を經て賴めば、相當の手續によつて、其日の午後六時よりの明日の午後六時までの、天候を豫知することが出來るから、之れを揭示板なり、又は信號標を竿頭にかけるなどして、一般に豫告するのである、これの利益は、なかく〳〵一通りではない、くわしき事は測候所から發行する精細書を賞へばわかる、しかし一通りは、新しい國定敎科書尋常科卷の十二に說いてある。

新聞……は毎月三回一の日、又は毎月二回、毎月一回宛等に發行してゐる。元より簡單明瞭で謄寫板を用ひれば宜しい。廣島縣治隈郡千年村の山本氏は、印刷した相當のものを、發行せられてゐるから參考のために、一讀して置くもよからう。

申す迄もなく鄉相當に必要な智識を啓發し、名士の感話す言和歌等を載せて、德性を養ひ、善事を賞し惡を責め、時事を報導し、新しい發明や、時節ものを紹介するのである。この利益及勢力は實に意想外なものである。

又久しく他鄉に出でゐる人も、故鄉の事が手に採るように知れるし、無鄉の人が鄉の事情を書き送りたい時には、これを買ふて送ればよいし他鄉にある人は、自ら故鄉を忘れず、久し振りに歸つて來ても、大體の樣子を呑み込んでゐるから、調子はづれの事もなく、他所々々しい思ひをせぬでもよいことになるのである。

又この他に適當な手筈を定めて置いて、新しい規則の出たとき、病氣の流行するとき、演說會のあるとき、珍らしいもののあるとき、などには時を遲さず、印刷して配布するなり、戶毎に言ふて回るなりするようにしたいものである。

(二)　救恤補助

世の中に病氣に罹つていながら、治療の出來ぬ人程哀れなものはない、又藥を飮んでも代價が拂へなかつたり、猶酷いのになると、醫師を賴んでも顏出しさへしてくれぬことがある。急病人を扣へてゐながら醫師を迎へることすら出來ぬのが少くない。されば青年會は常より準備をなし、又慈善家の同情に訴へ、貧しい人に準備をさせなどして、不自由なく、醫藥を與へ、醫師にかけ合ひなどする事は、言ふに言はれぬ、大な

る功德をなすものである。

又貧民兒童に學校用品を貸し與へ（今では町村自ら準備してゐるところもあるが、多くは情ある教師の懷中を煩はしてゐるが多いのである）耕作の出來ぬ田畑を扶け耕したり、火事、求難の後仕末、行路病人の世話（隨分無責任に放つてゐる所が多い）などを適當にせねばならぬ。

婦人會に交渉して、良家より古着などを寄附として集めて消毒し、處女會員に洗濯さして、貯へて置いて、貧民を助けるほどの方法はいくらもあると思はれる。

又孤兒院、育兒院の依囑を受けて、其出張員を世話したり、活動寫眞隊を扶けたりもしたいものである。

(三) 衞生設備

養生は人と生れて大切なる道である、まして死にたいものは一人もなく、親子兄弟姉妹間の義理を考へたならば、人は益々養生の大切なるを思はねばならぬ。今頃は氣で病を癒す事が大流行であるが、心に任せて身體を放つて置くことは出來ぬ事勿論不道理な考である、豪い人が身體を粗末にした例などは、賞むべき事でなく、又多くはそれ相當な覺悟があつての事である、それを早合點してつまらぬ事をしては言語同斷である。

人々各自分で養生をせねばならぬ事、勿論であるが、多人數一致して衞生に注意する事は、甚大切な事で且又、非常に效果の擧がるものであつて、それだけ世間即ち各自の幸福となるわけである。近頃衞生々々とやかましく言ひ出してから、傳染病の流行が、非常に減じたことは到るところの避病院が、只飾り物となつてゐるのでわかる。西洋人が傳染病に罹るを甚しく恥ぢて、其の人其土地を野蠻とすると言ふことは、まこと

に道理で、われ〳〵もよく〳〵考へねばならぬ。

元より町村に於て大仕掛けの事をやるから、よいようなものの、青年會などは殊に注意して、衛生法を研究し、醫師、警察官と聯絡を保ち、傳染病を豫妨し、飲料水の精撰をはかり、下水を洗滌し、不衛生な飲食物の販賣せらるゝ時は、警察官の罰を受けるまでに、豫め忠告して止めさせ。よくある事で、病後の不潔物を放棄してあるような場合には、警官に告げて、燒棄するとか、本人に注意するやうにせねばならぬ。

又毎年二回位まづ青年會員より體格檢査をうけ、更にこの風を一般に奬勵するようにしたいものである。

(四) 非常救援

これ青年會の、最も世間より待たるゝ處で、又青年の花を咲かすべき、腕の試し時である、それだけ青年の責任は重い、それだけ世の信用を博する時であるから火事、難船、溺死人、洪水、轢死人、投身者、怪我人、地震等の非常時變には、時を移さず、最も敏速に、最も大膽に、最も完全に救護救助の手段を盡さねばならぬ、事が大なれば大なるだけ、面倒なれば面倒なるだけ、道か遠ければ遠いだけ、それだけ、青年の心根を練り鍛へる機會である。常々部長係員を定め設備を整へて、練習を怠らずして、共同、尚武、忍耐、機敏、大膽等の精神を養ひ一朝事あれば、死力をつくして、其眞精神を發揮すること、實に青年時代の花、一生の快心事である。

準備

救急療法の練習、心身の鍛練法の修養

一、消防器一式、防火用水池、救命器、網、網、水槽、莚、天幕、棒、槌、杭、暗礁標識、燈臺一式、細綱、鍵繩、繩梯子、蓁蒲團、擔架、角燈、消毒藥、醫藥、望遠鏡等。

(五) 道路修理

交通の發達したる所ほど、開明であるので、立派な國、立派な鄉ほど、立派な道路が出來てゐるのである。それゆゑ、道路を開き又は修理して往來に便利にする事は、何よりの急務で、いろ〳〵な集會も、鄉村の親睦も、みな道路に關係がある、まして非常時變に際しては、痛切に感ずるのである。

青年會はよくここの理を考へて、常に道路の完全を期し、山道を開き、里道毀損すれば、時を移さず修理し、狹きは廣くし、脆きは堅くし、水溜を埋め、板橋などの蝕穴を塞ぎ、欄干を丈夫にし、岩石を除きなどして危險を防ぎ、又一般に公益の範を示し、且一里毎に或は鄉毎に里程表(杭の簡單なるものと、板の委しきものとを)を建て、岐れ道には、指道標を建て、などして便利にせねばならぬ。方法は費用、手數を多く費さぬでも、簡單な、平易な、おもしろ味のあるものを案出すれば、興味あることである。

(六)　圖書館

一定の家に、種々な書籍を集め備へ置き、何人にても隨意閱覽させるのである。

世が文明に進むにつれて、日に月に種々な書籍が出來るが、これを一人して、買入れて讀むことは困難であるし、又不經濟で其讀んでしまつたものの始末にもこまる、貧しい人は猶更であつて、貧こい人、熱心な人でありながら、貧しいために、つひ一生埋れ木となつてしまふような事が少くないのであるが、こんな事は、其人の不幸ばかりでなくつまるところ世の不幸となるわけである。

圖書館が出來たならば、これに引換へて、どんな田舍に居ても、どんな貧しい人でも、自由に思ふまゝの、書籍の讀むことが出來て、人々の幸福は元より世の幸福となること、限りないのである、追々と其必要を感じる

ところから、都會はもとより、少しでも考へのある人々の居る鄕には圖書館を設けるようになつた。中には個人で開いてゐる特志家さへ少くはないのである。

青年會などは、よくここを考へて、何處の家でも、古本を持て餘してゐる事故、志ある人々に一冊二冊と寄附を乞ひ又は都會に古本を買ひ集めて、鄕を區分し第一號の函は第一の組に十日間と言ふように配布し、近所の婦人が集つて讀むか、一冊づゝ持ち歸り期限までに組長の家に持ゆく〳〵は立派な圖書館を設けねばならぬ、(よく書籍の蟲干、消毒をせねばならぬ)初はそんな大きなものを望まずとも、何れか都合よき一室を借入れ、管理を良くし、時々讀書奬勵法として、文庫内の書籍の中から懸賞問題を出すなども、おもしろかろうと思ふ。

又婦人のためには巡回文庫を設け、一定の函に三冊なり五冊づゝ納めて參じて函に納めて事務所を經て第二區に廻すと言ふようにすればよいと思はれる。

(七)　講話會

學者を招待して學說を聞く講演會、名士を聘して道話を聽く講話會は最も今日廣く行はれてゐるだけ、其効果は大きいのであるが、地方へ行くとまだ〳〵其必要を感じてゐるらしくも見へぬ所か少くない、人はそれ〳〵職業を有するだけに、日常極めて忙しくして、書籍を讀み、特にある事について、研究することはむつかしい。たとへ書籍を讀むにしても多くのものを一々讀むことは出來ぬ。ましてや文字を知らぬものは、この日進月歩の文明世界から取り遣されてしまふのである。また學問ばかりでなく、人の道も、兎もすれば、亂れ易く、これを一々戒の道を知らしめてゆくと言ふことは、並々の人ではむつかしく、又近所の人

は心安だてで、多くの人の道しるべはできにくい、こんな事では郷は進歩しないし、日日の事ゆゑ、いろ〳〵な爭ひも出來、人々の疑ひも生ずるわけである、又昔とちがつて、今の人は、なか〳〵頭から押へつけることは出來ぬ、どうしても、よく理屈を考へさせねばならぬのである。それゆゑ青年會は一致して、常々世の信用を得、相當の準備をして、鄕から出てゐる名高い人が歸つたり、又は他の名高い人が立ち寄つたりした時には頼んで話をして貰ひ、人々を集めて聽かせさへすれば、自ら鄕の智惠も高まり、又名士の感化によりて自ら、良い風習の出來るものである から、青年會は更に其よい時をはづさずして、いろ〳〵な事業をなし遂げたいものである。

まして小學校の教師達、及近所に居らるゝ僧侶、神宮、其他の名士であれば、必ず相當の意見のあるものゆゑ、時々乞ふて出席講話をしてもらはねばならぬ。熱心に頼めば、大抵の人は必ず承諾してくれるのであらう。

一、講話の時を撰んで、人の集る最よき折を考へねばならぬさりとてあまり、まご〳〵して、時を取りそこねてはならぬ。

一、講師をよく撰ぶことで折角招いても、話しがあまり六ヶ敷かつたり不似合であつて、話す人も興がのらず、聽く人も退屈するような不都合なきように注意せねばならぬ。

一、よく講師を紹介して其筋を明にし、聽衆をして不謹愼ならしめぬように、いろ〳〵と心配りせねばならぬ。

一、なるたけ同じような人を一つ所に集めるように、即ち男は男、女は女、子供は子供、青年は青年として置けば、話す人も戸主がかつたことは戸主の席に向ひ、婦人がかつた事は婦人席に向つて話しに力を入れ

ることが出來てよいのである。ござ〳〵してゐることは、殊に座敷などでは、甚だ話しにくいものである。

一、間々には、必ず蓄音器、兒童の唱歌を入れ、睡む氣のさした時には、青年歌の歌をうたふ、と言ふようにして、人の集る間、話の休む間を退屈させぬように、せぬと思はぬ不結果を來すものである。

一、よく〳〵走りまわつて、二度のところは三度と、案内して多くの人を出席させぬといかぬ、多くの人の集つたほど、話しよいものである、それに少しく四角張つた話になると、鄕中の人か揃つてゐぬと都合がわるい、さうでないと、聽いた人もあれば、聽かぬ人もあり、中には聽いた人から、聽きちがへて、とんだ、惡感情を起すこともあるもの親切で話したことが、却つて仇になるようなことがよくあるものである。

一、閉會開會を正しくし、室は長い室が、甚都合がよい、時間は午後三時頃から日暮れどころが最よい、夜間は割合に不適當である。

一、話す人は決して、お禮などは望まないがはりに、粗末でもよいから茶菓、夕餐を出すが適當の禮である、そして送り迎への如きは殊に鄭重にせねばならぬ。

次に講話の資料とも參考ともの一助にもと、講話の一つを擧げて見よう、これは十數回試みて相當の効果のあつたもので、つまりいくらか講話をしても、次には必ず申し合せたように、「そのお話はまことに結構ですが、とてもわれ〳〵には及びもつからぬ事であります」と言ふてしまふ、それでは、とんと効がないから、次に必ず一度は吹き込んで置きたい一言である。

心法

（通俗講話要領）

筑前の博多に仙崖和尚と言ふ豪い坊さんがありました、その教を慕ひまして近郷近傍の人はみな、大智識として、生佛様のように大切にしてゐました、ところがある正月の元日に、一人の大旦那がお禮に參りまして、さてお願ひするには、「昨年中はどうも不幸な事ばかりつゞきまして私も幸六十一の祝も致すことになりましたので、今年こそは是非ともうまくやつて行こうと思ひますにつきまして、どうか縁喜祝ひに、何か一つ芽出度い歌を書いていたゞきたうございますが」と言ふと、和尚はよし〳〵と首肯かれたが、すぐ筆と短冊を取り出して、すら〳〵と書いて旦那の前に出し、「どうじや」と言はれるので、旦那はどんなよい歌かと思つて讀んで見ると、こはいかに『家の外ぐるつと圍んだ貧乏の神』とあるので、旦那殿驚いたの驚かないのつて、果ては腹立ち紛で「どうも和尚さん大變な事を書いて下さつた、事もあらうに、元旦から貧乏の神と一所にされては、あまり情ないではありませんか」と言ふと、和尚さんにこにこしながら、「まあまて〳〵まだ次がある」と又筆を採つて、『七福神は外に出られず』と書いて見せられた、「どうだ、これ程結構な歌が、またとあらうか」と言はれて、旦那殿今更あまりの疎忽を恥ぢ入るほど道がは和尚さんと言ふて、お禮を述べて喜んで歸つていつた、それを聽いた、又一人の旦那殿、早速お寺に參つて、「和尚様私にもどうか芽出度い歌を書いて戴きたうございます」と言ふと、和尚さん矢張「うんよし〳〵」と言つて、なにか、すら〳〵と書いてくださつた、旦那殿讀んで見ると、「爺死ね」とある、あまりなんでも元旦早々、爺死ねとは、飛んでもない事を書きなさると思

つてゐると、次には矢張婆死ねとある、次には父死ね、母死ねとあつて、其又次には、子死ね、孫死ねとある「さあ旦那殿びつくりしたのせんのつて眞青になつて、怒り出したので和尚さん」まあまて〳〵これほど芽出度い歌があるものか、爺死ね、婆死ぬ、父死ぬ、母死ぬ、孫死ぬ、家の内がこのやうに順序よく死んでくれたらよいではないか、もし、子が親より先に死に親が老人より先に死んだら、それこそこまるではないか」と言はれて旦那殿なるほど道がは和尚さんと言ふて、考の足らなかつたのを恥ぢて喜んで歸つたと言ふことであります。

何事でも、この話のように、あとさきをよく聽いて見んで、早合點しては困るのでありますからどうか皆さんも、よく〳〵私の話の筋をかみしめてくださらねばなりません。

出來るか知らん　さてこれから、皆さんにお尋ねしたいことがある、ま

づ私が今迄いろ〳〵な事をおすゝめしましたについては、どうお考へになりまするか、そんなことは朝飯まへに、やつて見せると、おつしやれば、まことに結構でありまするが、さうでない、どうもそんなに言はれても、なか〳〵思ふように行くものではありません、どうも私等のようなものに出來るかわからん、なか〳〵むつかしいことである」と言はれるかも知れんと思ふ、無理のないことであると申し上げたいが、さうではないのであります、決して出來ぬとは申させません、又申すわけはないのであります。それではどうしたらばよいかと申しまするに、なにも他に心配する事はない。

只一つのもの　只一つのものがあれば、只一つの覺悟があればよいのであります、さて之れはなんでしようか、一口に言へば、なんでもないがさてなか〳〵おいそれと出來ぬことである、げれども、これほどなんで

もないものはない、さあそれは何かと申すと即ち皆さんの心一つ、さあ心一つ、これだけであります、斯様に申せば、なんだか、ぼんやりしてゐますが、ほんのこれだけであります、昔から女の念力は蛇體ともなる、とか髪一筋は象をも繋ぐとか、又なんのその岩をも徹す桑の弓とか、精神一たび到らば何事かならざらん、とか申してゐるとほりに、人の一念ほど恐ろしいものはありませんので皆さんが、ほんとにこれは良い、やつて見ようと決心なさつたならば、只其心を一つに、やつてごらんになればよいのであります、智慧はなくとも、學問がなくともできるのであります、そこで私は、その訳けを、もつと〳〵委しく今日はお話しいたしますから、どうか禪をしめていや腰卷をしめて聽いて下さい。

澤庵禪師と柳生但馬守　まづここに生きた、最もおもしろい例を、お話しいたしましよう、ときは今より二百年あまりも昔、徳川三代將軍家光公のおんときに、江戸今の東京ですな、その江戸の城下を一人の稚ない童が水坊主が、ぶらり〳〵と歩いて居りましたが、ふいとやつて來たのがある大きな屋敷の門前、ところがその大きな屋敷では、エイヤー〳〵といふ掛け聲と竹刀の音がはつし〳〵と聞こえる、ほうえらい勇ましい事じやなとその坊さん、つぶやきながら、ふいと玄關を見上げると、大きな金看板にもつて、將軍家師範役、天下第一柳生流元祖柳生但馬守道場とある、坊さんこれを見て、ほほうえらい勢だわいとつぶやきながら暫く樣子を窺つてゐたが、なんだつまらないとつぶやきながらずた〳〵と行きすぎようとした。ところが最前より、極しな奴じやと、思ひながら目をつけてゐた門番共、それを見つけて、どうしてだまつてゐるよう、坊主まで、と呼び止めた、ずるとと坊さんは立ち止まつて、なんぞ御用がいと、ずましてある、そこで門番は、御用

もくそもあるもんか、貴様は、全体なんと、ぬかしたか、今一度言ふて見ろ」と腕丈け高に問ひつめると坊さん、情ならしい程落ちついて、なにかと思へば、そんな事か、なんだつまらない、と言ふたまでさ」と言ふて行かうとするので門番怒るの怒らないのつて、真赤になつて「おのれ生意気坊主ここを何処と思ふ」迚いやそこに書いてあるとはりじやわい」「おのれこれが見へぬのかながら、よくもそんな悪言を吐きやがつたな天下の御免許番にむかつて、なんと考へてゐる」と言へば、坊主の方では「天下の御免許が何んであらうが下手なものを下手だと言ふにわけはないじやないかい」と、どこまでも、番気でゐる、そこで門番はますます赤くなつて「ほえてみる、その辱を聞きつけた屋敷内の弟子連中にが起つたかと、どやく〳〵出て来て見ると、この始末であるから、おのれ憎い坊主めが、さあ止れ、上つて勝負をせい、をれほどぐすく〳〵言ふ

ならば、まつと心得あつての事であらう、さあ上れ〳〵」と言へば坊さんは「おれは武士ではない坊主が剣術知つてゐるものかぞんなことは嘘〳〵」と言ふやうを、無理に引張り上げてしまつたさていよいよ道場に引出して見ると坊主は別に驚いた顔もせぬげんりと場中を見渡してみる、道場には何百と言ふ弟子がずらりと並んで、この坊主どんなるものかいまに泣き面がくとにらみつけてゐるそこへ飛び出したのは、道場中の兄弟子の一人、当時鬼熊を以て名高く今でも講談に名前の出る、鏡本の武士近藤登之助、木刀を提げてゆう〳〵と出て参り「さあ坊主試合致せ、ついては何かもて、武士が素手のものと勝負するは恥辱とするところであれば、貴様何か持つて向へ」と言ふと坊さんが言ふには「なんぢや試合をせいと言ふのか、わしは坊主だから剣術などは知らんわい、そんな木刀などを、どうして持つやら使つたこともなければ

い」と平氣ですましこんでゐる、登之助怒り心頭に發して、「おのれ武士に向つて、素手で立會とは小癪な奴、何か持て〳〵」と言ふと、坊主首に掛けてゐた頭陀袋の中から珠數を取り出して、「おうここによいものがある」と言つて、「さあ〳〵」と向つたので、登之助ます〳〵怒り、「おのれ珠數をもつて向ふとは、人を馬鹿にしてゐる奴おのれ一打ちにその頭を打ち割つてやらう」と大上段に構へて、やあ〳〵と打ち込んでくる所が不思議な事には、坊さん、うまく身を更して、なか〳〵打たせない、登之助これは少し合點が行かぬ、たかが雲水坊主一打ちにと、打ち下し打ち下すけれど、坊主のすばしこいことは驚くばかりで、どうしても打てない、そのうちに、登之助ます〳〵氣はあせる、汗は瀧の如く流れ出る、とう〳〵ひい〳〵言ひ出した、その折を見計らつて、坊主は只一聲「かーつ」と奴鳴つた、すると登之助がらりと木刀を投げ出して「參つた」と言つてしまつた。

それを見た、今一人の高弟氷野十郎左衛門、これは幡瑞院の長兵衛を突き殺した亂暴もの「おのれ憎い坊主め、おれが槍の錆になれ」と槍をとり〳〵、そして立ち出でた、「さあ今度こそは眞劍勝負だ、貴樣の命はないぞ何か持つて向へ」と言へば坊主は矢張平氣なもので、「おう、ここによいものがある」と言ひた風で前に立つた、十郎左衛門怒つた、武士を合手にするに棒を持つて向ふとは、あまりに人を馬鹿にした奴、おのれ只一突にと、突き出した槍あはれ坊主只一突に血煙立つて倒れたと思ひの外、すう〳〵つと身をかはして、平氣でゐる、そんなはづではないが、と、又一突又一突ところが坊主右を突けば左に顯れ、左をつけば右に顯れ、流石の水野も、只ひい〳〵言ふばかり、そこを見計らつて、今一突と突き出す槍を坊主はえいと言ひさま、槍をもつて其槍を押さへてしまつた、さあどうしたものか、その槍

が少しも動かぬ、水野がどんなにあせつても、もう突き出すことも、引込むことも出來ない、呆ひい〳〵言ふて汗を瀧の如くに流してゐる樣かと、弟子共はどうなる事かと手に汗を握つて見てゐると、坊主が「かーつ」と叫んで、その槍を放すやいなや、水野は、二三間も後へくる〳〵と引きくり返つて、槍を投げ出し「うーん」とはねつてしまつたので、弟子共は吾を忘れて、あまつさへ果れてものも申さず、坊主はしかにも平氣な顏をして扉打ち拂ひすた〳〵と立閊さして出て行く、これを最前より無にありて見てゐたところの柳生但馬守宗矩、高が一人の雲水坊主にこの道場を踏み穢らされ林無念至極いで早一打に打ち殺つて後日の怨を絶かけれども、とてもかどうでもありはしよう、平氣ですた〳〵出て行く後姿

を、坊主は「待て」もなく、如何にも悠然として、道がは柳生但馬守宗矩の門前を出るとき、なにをするかと、心の中に大層驚いてしまつたが、ちらり、と睨んだ、その眼の光に打たれた柳生但馬守、はつと頭を下げ、刀を投げすてゝしまつて、いきなり坊主の袖をとらへた、はら〳〵と涙を流して「どうか一生のお願ひでござる、おき屆け下さるやうと屆ふ顏をして、「なんぢやい」と言ふ坊主は飽くまで平氣で、「なんぢやい」と言ふ坊主は飽くまで平氣で、守では、もう已れを忘れて、何を御秘し申さう、拙者こそ、この廣い天下に唯一人の達人と自ら許し世間も許し、且つ又かつてゐる次第でござる、然しながら拙者實に心中に不足に堪へず、恐ありとして居る事がござる、拙者恩師より劍道奧義を授けられたる時訓められた一言教は業に於ては天下一流をまで上達するをあらうか

なれども、決して棄たげでは、劍道の至きものではない必ず心法といふものが大切であるぞと言はれたことを日夜忘れず、如何にもして、心法を學びたしと心を碎くも、なか〳〵良き師なくして、今日に及び申した然るに貴僧を見奉るに、世にも尊き心法を御成就の事と存じ申した、如何かこの柳生一生のお願ひでござる、哀れと思し召されて、今日より其心法をお授け下されたい」と熱涙と共に歎願したので坊主も不愍と思ひて、それでは今日より弟子となし遣すと言はれたそれよりは柳生但馬守の心法日に〳〵効をあらはして、遂にあの大達人となつたと云ふことであります、この坊主こそ即ち時の天下に譽なき大知識品川東海寺の澤庵禪師でありました、これが心を研けば、これほどの働きの出來ると申す一例で、この澤庵禪師のお話は、いくらもございます、又ある時期鮮の國より一疋の虎を將軍家へ獻上して參りました、何を申して

も、日本には初ての事であるから、大層な評判でございました將軍も珍らしき事である一度觀ようとおぼしやつたそこでいよ〳〵當日は數多の役人が居並び澤庵和尚も柳生但馬守も御供いたしてゐますと將軍はあまり見事な虎の有樣に感じておられたがつひ傍にある和尚と但馬守に向はれて、どうじや一つ中に入つて見ないかと、言はれると澤庵和尚は、一寸入つて見てもよろしうございますと答へたので一座の人々驚いてもまつた、どうも和尚がいかに豪いからとて、あの猛り狂つてゐる虎の檻に入るとは、あまりではないか、吃度やられてしまふであらうと、皆舌を呑んで見て居る、まつ柳生はりその仰より但馬守今更後に引くわけにはゐかず、覺悟を定め、鐵扇をふりかざして、檻をあける と、道がの虎も其威勢に恐れたものか、今迄の勢にも似ず隅の方へ少さくなつてしまつたので、さすがは柳生但馬守であると、感心してしまつ

た。すると弁慶は御蔵和尚すみ〳〵平気で、囲かれた中の人々はあの僧で葉の中に入るのかと、顔色かへて見てゐると、和尚平気で其まさすりつつも、錫をあけて入つて行所が虎の檻穴を怒つて只一撃にするかと思ひの外、峰近の態度はどこへやら、猫のようになつてしまつたそしてもなつかしそうにつきまとふので、一座の人々もう呆れてしまつて開いた口が塞がらない、和尚はやれ〳〵又来もだと言はんばかりに、すうつと出て来た、そこで人々が、どうも不思議にたへ切のでとり〳〵に其わけを聞けば、和尚はすましたもので、いや別にどうもありはせぬ、人々は虎などを見ると大層恐ろしいものにもして命がせで虎のほうにもしても虎が逃ろしいことあまた他とも思はなく、只やれ〳〵逃いところから只一足飛に、帰つて来たまでの事しいことであらうかわいさうな奴ではあると思つて、逃びにいつてやつてはかりである、虎もよくもにさとるから、あのように喜んでゐてくれたのだのおやと言はれたので、本々今更の如く和尚の徳に感心致しました。ござとするなところが世間の人々はどうであるかと言ふに、なかなかか一通にはならない、中からせんでわざとする、例令ば、人が馬鹿にしはすまいかと言ふので、わざと家ういう風をするから、自分では嫌いと思つてゐても、人の方では何か芝居してゐるようで、おかしくてならぬ、又親が子供の方では却つて子供の方では却つて親が死亡つても、おれは親だぞと言はぬばかりで、笑つても、怒つてもまるで芝居おかしいであらう。其外道を歩いても、でもするやうに、心あるものが見たら馬鹿々しい、何事でも、わざとする程いやなものはない、あの高慢でも、第々口をあけてゐるものが、某時にロを開けてはいけませんと言はれて、無理に口をあけるはめるから、むう

と何か目に入れてうつしてゐるようになつてゐるし、身體でも腕を張るとか何とか壯士芝居のようになつてゐるのであります。これでは人に笑はれる、笑はれるから、笑はれまいとするのであはれもわざといろいろな風をする、そこでなほ笑はれると言ふことになるのであります。

劍道秘傳　ここに關口家劍道の秘傳にこんなことがある、「行かず止まらず自然の妙、一般の水魚水中に動く」となるほどここである、これは氷中の魚がうまく水中を泳いでゐるのに例へたのであるが、剩り易く申せば、即ち勝とうと思つては負ける、負けるであらうと思つてもまけるやまり勝とうと思つて、ゐるもどうしても、あせるから一方が留守になつて、敵にたまされ易くして遂に思はぬ負け方をする、負けはすまいかとおず〳〵してゐると、手も足も思ふまゝに動かぬから遂には負けてしまふのである、それではどうしたら、よいかと言ふに、只一心にやつて行く、勝つも負けるもない、只一心に打ち込んで行けば、敵に隙があつたら打ち込まうしなかつたら守らうし、打ち込んで來られたら防がうし、只一心でゐると、一方にばかり氣をとられはせんから、よく進理がわかつて手落ちがないのである、永續きがあるので、つひには勝つのである。

天晴なるべし　そこで皆さんに希ふことは、必ずわざとしてはいかぬ吃度勝負する、またこれほど心配なことはない。それよりも只一心にやつて行けば、何もいらぬ心配をせぬでもよい、田舍者は田舍者でよい、貧乏人は貧乏人でよい、馬鹿は馬鹿でよい、只自分のよいと思つた事を一心にするのである、又それより他に道はない自分のよいと思はぬことをしてどうなりましよう、そのうちに〳〵進歩してまゐります、皆さんが世間をごらんになつても判りましよう、子供ほど可愛いものはない、あれは少しもいやな考がない、ほんとに無邪氣であるから、とこ

あがたん〳〵大人びて來る、まして、ハイカヲにでもなると人が皆嫌ふ、あれはわざとするので鼻につくがたまらぬ、それと同じことで田舍者が上方で失敗るような、眞面目にやつた事は、笑はつても、むしろ愛嬌になる、惡氣がないのであります、ハイカヲが笑つたら、泣いたらすれば、嫌やなものの標本になるのであります。

道歩の道、それで皆さんが世渡りなさるについても、また青年會婦人會派遣んで行くのも、決して自慢して、これ位のことと思つてもいけない、成るべくまらぬ心配をせぬでもよろしい、只一心にやつて行けば、自ら道も開ける者さんが谷を歩いても、さうでる、あゝもう行きつまりかと思つて、振返つてはならぬ、ずつと山と山と狹く靑つてゐるところで立派な道があつて、そこを出て見れば又廣々とした野があるやうで道は自ら開ける又二階に上るにしましても、あの上まで上がれるかなあと、心配してゐる間に時が經つ、まつ一段上つて見るとずつと、ばゝあこれは易い、となるから又一つ上る又一つと、だん〳〵經驗も出來、調子に乘つて來るから、たう〳〵上まで上つてしまふのであります、たとへ落ちても、それはよい敎訓となつて、却つてために成る。又蟲が石の下になつた時に、おゝおれには、とてもこの石の下を出ることは出來ぬ、あきらめてしまへば、とうく死んでしまふけれども、まづ試みに力の限り、もがいて見るがよい、ずつと土を掘れ又何んとか方法も出て來て、とうとう石の下を出ることが出來るのであります。

非常の働らき＝考へてごらんなさい、あの火事だとか、洪水だとか言ふときの人の働らきを、まるで常の人とは別人のような、働らきをするのであります、その時がすんでしまふと又元のやうに、つまらなくなつてしまふ、これは何故であるかと言ふと、

らぬ人となつてしまふ、これではならぬ、そこで私がお話した時には、えらい元氣であつても、後になつて忘れてしまはれては困ります、お互のためでおりませんから、これが永く續き、ますます進歩するように、例をお話しして置きましよう、私の例を申すも如何と思ひますが、まづ手近いし都合もよいからお話いたしましようどうせ自慢であります。

ある夜（先日でした）八々と爐を圍んで話し合ふでゐた時、傍で座り相模をとつたものがあつて、机にあたつた、その柏子に机の上の置洋燈が落ちて硝と盞が二つになり、所もあらうに爐の中にワク〳〵おこつてゐる火の中に落ちてしまつた、さあ一座の人々目を見合せてしまつたそれを取り上げたらよいのである、理窟は易い、けれども、そう易くはいかぬ、皆只狼狽へてしまつてゐる。其時に私は、もうそこに居なかつた、そして縁先に出でゐましてそしてランプを雪の中に持ち出してゐた、あの熱いものを如何してと思つて、よく見ると、なるほど、いつの間にか手に手拭を巻いてゐました、これだけのことと私には夢中である。

まことを不思議と言へば不思議であります、もの事は、こうなくてはならぬ、うろ〳〵判斷してゐるうちに大きな事になつてしまふのでこの判斷とすることが、もう、少しのすき間なく、ほとんど一時に出來てしまふと云ふことは、まことに大切な事であります、まれお話しすればいくらもあることで、皆さんにしましても、もう一所懸命に逃げるときには、田とか、川とかの別なく、平地をゆくように、うまく走つてゐる、扨て川に落ちたりしない、これを神助けとか申しますが、これは一心になると、その分別と働らきが一つになつて、一寸その時は判斷がつかぬのであります。

親鸞上人が北國をお廻りになつて、破れ衣のまゝで、國々に說敎をな

ありました、時は、もう生き佛樣のおいでと言ふので、非常の評判であり
ました、夫れを聞いた山伏仲間でも、なか〳〵の豪ものの辨念と言ふが
おのれ憎い賣僧めが、愚民を惑して廻るに違ひない、一つ怪けの皮を引
きむいてやらうと、えらい勢で、上人の旅舍へ押しかけて、親鸞に會ひた
いと、怒鳴り込みました、すると此方にお通りあれとて奥の一室に通さ
れましたので、今に見ろ怪けの皮を引むいてやると待ち構へて、ゐると
きに、すうつと、襖が開いたので、ふつと見上げるその途端に、さつとさし
た、御光に辨念眼くらんで、はつと伏せつてしまつたと言ふことであり
ますが、それは御光か何かわかりませんが、つまり上人の氣高いお姿を
見心を奪はれて思はず、ひれ伏したのでありましよう、これ上人は刀も
かけ勿論手もかけず、叱りもせないたゞ其氣高い心一つで、この山伏を
拂へてしまはれたのであります。

黒住宗忠

又黒住教の開祖である、黒住宗忠公が岡山の町を供もつ
れずに只一人すた〳〵お通りになつたそのころは武士の橫行甚しく
もう夕方には、どの家も戸を閉ぢてしまふと言ふ有樣でありました
公はそんな事に頓着なく平氣で歩いておられるところを後よりつけた
る一人の曲者大刀振りかざして、今や一打ちに打ち下さんとする時に
公は只一聲、お控へ召され」と言はれた、そのはづみに曲者はがらりと大
刀を投げ出して、ばつと地に伏してしまつたと言ふことであります。
これ等の事はよくあることで、心を鍛へ上げたならば決して出來ぬ事
ではありません、實に人の心と言ふものは恐ろしい力を持つてゐるも
のであります。
これを皆が身に容れてゐないか〳〵してゐるからしてこの大切な
寶を持ちぐされにしてしまふのであります。

極樂婆のはなし　ここ又に一つの、たとへ話がある、ある處に一人の信心の深い、婆さんがあつて、念佛を唱へさへすれば極樂に行けると聞いたものであるから、毎日、南無阿彌陀佛々々々々々々で暮してゐました、ところがいよ〳〵壽命が來まして、死にましたので、さあこれから極樂に參らうかい、と生前唱へた、念佛を、一つ殘らず背負ひまして、てく〳〵と參つたのが、閻魔の廳、すぐ通して貰へると思つたがさうでない、まあ待て〳〵と、大王は赤鬼青鬼を呼んで、この婆の念佛を檢査せよと言ひつけられた、婆の方では、もうしめた、こんなに澤山あるのだもの、きつと賞められるであらうと思つてゐると、二疋の鬼がいよ〳〵檢査にかかつてみれば、こはそも、いかに、どの念佛も〳〵、篩にかければ〳〵落ちてしまふし、箕にかければ、ふわり〳〵と飛んでしまふ、婆さん、今は氣が氣でないけれど矢張どれも〳〵みな實のあるやつはない

殼ばかりだ、婆さん今はもう落膽して青くなつてゐると、一番しまひに、只一つこと〳〵と箕に殘つたのがあつた、そこで大王が言はれるには、「お前も幸なやつだ、只一つ實があるわい、それに免じて極樂にやる」と仰せられたので、婆さん、生き返つたと言ふか、死に返つたと言ふか、やれやれと胸なで下して極樂に行つたと言ふのはこの婆さんは、只念佛を唱へその唱へた念佛に實がなかつたと言ふことであります。つまり婆さんればよいと思つて、只無暗矢鱈に、目が覺める、南無阿彌陀佛、湯がたつ南無阿彌陀佛、あくびが出る南無阿彌陀佛、蚊が噛む南無阿彌陀佛で暮してゐたので、一つも本心から唱へたものはない、それでみな殼ばかりであつた、ところが、ある夏お寺に參つて歸りがけに夕立がやつて來て、もうゴロ〳〵〳〵雷がなり出したので婆さん、もう南無阿彌陀佛の百萬陀羅も言つて門を出るやいなや、ピカーリゴロ〳〵〳〵ピシャー

リツ、と頭の上に落ちたものだから、南無阿彌陀佛つと言つて目を廻してしまつた、これこそ眞に心から唱へたので實があつたのであります　なんと、よいたとへではありませんか。

世渡の根本　さあこれまでお話しましたならば皆さん心法と言ふものが、お得心になつたろうと思ひます、それでどうか寢ても覺めても心と言ふものを忘れず、そしていつも油斷せずに、一生懸命なさつたならば、どんな人でも出來ぬと言ふ筈はないのであります、たとへて申せば山に行つても、決して恐ろしい事はない、狼が出て來ましても、さうですなにこの奴がと、侮つてはいけぬ、又もう恐ろしいで氣を奪られてもいかぬ、さうすると手も足も動かなくなつて逃げるに逃げられんで、食はれてしまふ、そこでまづ叱はぬと思つたら、もう恐ろしいも何もない、一所懸命に逃げたらよい、崖から落ちても、身體に力がこもつて居れば滅多に死に切るものではありません、きつと蘇生します、これは、柔道のまいものが、いくら投げられても怪我をせないとおなじこと、只の人はぐたりとすりんと、身體を投げつけるときに、全體は力が籠つてゐないで、片一方だけに力が籠つてゐるものであるから、體の重みがみな、そこに寄つて、えらい怪我をするのであります、刀で切られると、もう切られたなと思ふ、手を打つとあゝもう怪我をしたなと思ふ、からして、せんでもしでしまふ。

我の知人の家に、一つどうしても碎けない、つまり落したとて、碎けない皿がある、實に不思議であると申してゐますが皆さんは如何お考へになりますか、私は斯樣に思ふ、これは決して不思議ではない、一口に言へば、この皿は、まことに、上手にこしらへられてゐるのである、上手な人の手にかかつたか、又は運よくひよつとさうなつたか、どちらにしても兎

に角うまく出來てゐる、そして皿の具合がよく釣り合ふてゐるから、たとへ板の上に落しても、つるーりと平均してしまつて、決して他の皿のようにがちやりといかぬ、つまりよくすべる、よくすべると言ふのは、釣餌が、わき道に入りましたが、崖から落ちましても、この通りで一心に南無阿彌陀佛で落ちたら怪我をせない、これほど結構な事が澤山ありましようが、私はよく婆さんに聞きましたが、棚からドンブリが落ちた時に、お神さんが南無阿彌陀佛つと言つたら、實があつて碎けなかつたと申します。

まあこれは、戲談かも知れませんが、皆さんが今の狼に逢ばれても、さうで、もしとても逃げられぬとなつたら、何も困ることはありません、只もう鎌でも、棒でも、もつて滅多打ちに打てばよい、どうでも頭を打たねばならんなどと、考へてゐたら、却つて、あたるものではない、その間にねらひは、外れるし疲れはするとう〳〵食はれてしまふ、それで只もう一所懸命に打ちすへさへすれば、いつの間にか、うまくあたつて頭の中をうまく打ち碎ひてゐるようなことがあるかも知れません、よくある事で一所懸命になつて、とう〳〵目を廻してしまつた、さて今度蘇生つたときに、見れば、自分は死んでゐないそして、あの恐ろしい仇を見れば傍に死んでゐると言ふような事があるのであります。

それで兎に角、心の働らきと言ふものが、わかりましたからは、どうかまず〳〵研き清めて、自分がよいと思つたならば、精一杯する、決して、心配せぬでも、落膽せぬでも、遠慮せぬでも、その間があつたら手足を働かせるがよい、さうすれば私が申し上げた事も、決して六ケ敷ことではない、又其他の事にしても、出來ぬと言ふ筈はないのであり

ます、只注意すべきは、輕はづみな、一足飛をする事がよくないので、それさへなく、骨を惜しまず、やつたならば、自らよい考も出て來るし手足も動いてくるし、思はぬ手柄も出來るわけでありますから、どうかよくよくことを考へて下さつて、皆さんのためであり、鄉のため國のためであることは、きつと皆さんの上に報ふて來るのでありますから、どうか皆さん奧々も、しつかりやつて下さらんことをお願ひ致します、つまらぬ話が永くなつて、お氣の毒でございました。

(八)　年中行事

一ケ年間の作業を豫め定め置き、之によりて月々の行事(殊に農業)に手落ちなく又は遺算なきを期すことは極めて大切である。農家に於ても、之さへ定めて實行さへすれば、監督官廳より督促を受けて急に狼狽したり、知らず識らず、時機を過したりすることなく、年中働く事が平均するから、今日三時間働いて、翌日十三時間も働くと言ふような不都合なく、且心もあせらず、心配も少なく、愉快に家業を勵んで、よい結果を得るはずである。假令改良々々と騷いでも、大切な行事を誤り、時を違へては、得るところは、むしろ失ふ所を償ふに足らぬ結果を來すであらふ。經費の豫算をつくり決算を明にしておるからには、年中行事の豫定をつくり、實蹟を調査すべきは當然のことであるに、多くの人は、目先の小さな金錢上の事のみに豫算をつくつて、その大本の事業の上に豫定を作らぬとは、あまり考のない事ではあるまいか、青年會などはよく、こゝを考へ、年中行事を研究して、年の始めに一般の家々に印刷物を配るもよし、毎月又は其前日より行事を掲示し、又は手分けして、ふれ知らしめることが肝要である、參考のため、某郡所定の年中行

事の一例を記して見る。

一月　祭日其他　一日、四方拜。二日、休日。三日元始祭。五六日、寒に入り。三十日、孝明天皇祭。

製造　上旬、籠具、馬具農具の修理、繩、草鞋、草履、其他莚、菰、裝、背負具等(初旬より二月下旬まで)

中旬、堆肥其他肥料の製造、炭燒、

下旬、同上

整地下種　上旬、樹木苗圃苗床へ植栽地拵へ、三月中旬まで、中下旬なし、移植なし、

手入　中旬、春の第二回補肥土寄、第二回踏壓(下旬まで)

下旬、桑の害蟲驅除、林木の間伐、

收穫　上旬、葱及び人蔘(中旬下旬に亘りたる)

其他　前年度日誌の調査其他農場諸帳簿の整理籠種の寒水浸し、(五六日より二月四日頃まで)

家族會　(三、又は五日に行ふ)農蠶講習會開催(農閑を利用して)

(九)　受托取次

書籍購入取次　このごろは、廣告で人を釣る方法が巧みとなり、殊に地方の人はよく欺かるゝし、又店の數が多くして、人が取しらべに迷ひ折角購入したくとも、如何なものを選んでよいか、何處に註文してよいか、と迷ふ人が多い。其上僅かな事のを註文する手數を面倒に思ふ人もある、こんな人々の便利を謀り、其注文を一まとめにして、取引の書店より購入して渡し、相當の手數料を受けるようにすれば、お互の利益である。

物品購入取次　前の說明と同じ事であるが、更に都合のよいこと

は、澤山まとめて注文すれば、安價で購入出來るし、又信用ある製造所を選み、良品を購入することが出來る。

勸誘　國家的の有益なる事業、例令ば、赤十字社、愛國婦人會、日本海員救濟會、武德會、水產會、農會、軍人後援會等又は非常事變即ち戰爭、火事地震、洪水、海嘯、饑饉等のあつた時の救恤會又は出版協會講習會などの出來た時には、勸誘して多くの入會者をこしらへ、又は寄附金募集につとめたいものである、しかし餘程場合を考へて程度を考へぬと、あまりに無理をいひ、繁々しく、勸めて、感情を害し、却つて信用を落し、世間に迷惑をかける事となるのである。

代書　委しく言ふ要はないが、たゞ二通りにわけて、普通のものは代書でも代書し、親書は特に會長、又は特に信用ある幹事が代書して與へるがよい。

第四章　產業振興

(一)　共同出稼

家業の閑散なる季節を以て、他國に出稼する風習は、古來各地に行はれてゐることであるが、これは出稼地の產業に大なる關係があると共に各鄉村のためにも、餘程の影響を來すことであれば、今後は益其方法手段を改良して、この美風を奬勵したいものである、其改良すべき要點を言へば、

一、出稼地に於て、金のあるに任せ、又は旅の恥位の考を以て、放蕩するを妨ぐために、共同監督又は區間監督等の制を設ける。

一、出稼地を爭ひて互に損失を招き、又は出稼紹介人の奸策にかゝりて不要の失費をなし、或は約束變更をなして、責任者を困らしたりなど

するを妨げ、相當の機關を設くる。

一、各職業の講習會を開いて、技倆を研き、且出稼先に對して、相當の保證及注意をなす。

一、出稼地と聯絡を明にし、各地と相互救助の劃を定めて、音信、交際、病氣補助等に適當の方法を講じて、家族を安心せしめ、且なるたけ共々に旅行して、其間の共同精神修養を有効にする。

一、出稼收益金の取扱ひを便宜にする。

(二) 共同請負

道路の修繕、貨物運搬伐り木の出出し、地ならし等の事業を請け負ひ、其收益金の中の一半を、基本金に積み立てることは、極めて、都合のよい方法である、請負はせる方にても、青年會の事業を贊助する興味もあり、且信用して任せることも出來るし、割合に經濟的である。しかし之を請負ふには、時期を選ばぬと、却つてまふ、そして、他の請負人と異り、信用が第一で、まして公共の事業となれば、公益の一端ゆゑ、つとめて完全をはからねばならぬ。

(三) 共同事業媒介

共同の利益は、日に月に經驗するところで、今は何事も共同の世の中で、どうしても、大きくて便利で、經濟なことは、共同の力に賴よらねばならぬ。ところがこの理屈が、まだ〳〵、はつきり呑み込めぬ人もある、又一寸手數のつかぬものである、そこで青年會の如きものが、よく注意して機會をとらへて、其媒介をしたならば、都合がよいのである。養蠶教師の招聘、又は水產敎師、製造家等を招聘して、其敎授を受けるなどのことは、全日最も賢こき仕方である、費用は、地方の有志關係ある實業家より出費を乞ひ、又は練習生より謝金を集め、或は村費より補助を受け、其成

織場を設却する等で調ふ筈で、さう苦しいものではないが、それに官廳等に募請すれば、なほ種々便宜を受けることが出來るであらう。

(四)　授　産

今日到る處、無職業の人が、增加するは、世の狀態で止むを得ぬとはいへ、輕々しく放つては置けぬことである、これには種々事情もあるが、つまり適當な媒介がないからで、少しくうまくやつて行けば、仕事はいくらもある、現にあのようにして、よく生活して行くであらうかと思はれる人が、而も仕事の少ない田舍で、隨分仕事を見つけ出してゐる、そして双雇ふ方では、人がなくて困つてゐることはよく見受けるのである。雇人では仕事がないと言ふ、雇主の方では雇人がないと言ふ、こんな不道理な事はない筈であるが、つまり適當なる所に適當な人が滯ち込まぬからである、間違ひをして逃つてゐるのである、そして雇主では仕事が捗取らないし、働らき人は、のらくらしては居られぬから盜人とか、賭博打ちの仲間に入つてしまふのである、其鄕に貧しいものがあればある程、鄕は衰へる、それだけ上のものは負擔が重つて苦しむはづである、又上が大きくて下が小さくてはつひに押し潰され、崩れてしまふはづである。ところが僅かの注意で、昨日の貧乏村が今日は一戶の人に賴よるものもない計りの盛んな村になつてゐる例はいくらもある、今の世の中は廣いから、淋しくて心配するごとはない、働けば必ずそれだけの事はあるはづである。

出來ることなれば、青年會などで、事業を請け負ふて、會基本金にするばかりでなく、貧しい人々を使用して、割のよい日給を與へ、强制でもよいから貯金をさせるとか、又はぶら〳〵してゐる人を斡旋し適當な職を紹介するとかしたならば、甚都合よいことである。これ等は何も、さうむ

つかしく考へないでも、たゞこの心がけであれば、折にふれて適當の世話のできるものである。

(五)副業

近來地方農村の日に月に衰退しゆくを見て心あるものは皆悲觀して心細く思ふてゐるようである、これは無理のないような事であるが決して賢こき事ではない、つまり其人々の考と努力が足らず、有志や主治者が不熱心のためであつて、もし少しく考へを取りなほし、少しでも研究し、方法を講じたならば、決して心細く考へるところではなくして、却つて自分等の地盤の上に立つてゐることが、幸福で、この地盤をますます堅く、美しく樂しくして行きこそすれ、徒らに都會の人を羨み、故郷を捨てることの、つまらぬ行であることを思ふであらうと思ふ。

そののぞむべき方法の一はまづ副業であらう、最も今迄は只無鐵砲にやつたために、失敗するものが續出して、世人をして副業の不可能を思はしめたのであるが、これにはいろ〳〵の理由があつて、決して副業其ものの罪ではないのである、我が國でも其副業のために、輸出の一富源を作つてゐることや、藁細工のお陰で村の破産しかゝつてゐたのを立派に回復したところや、一小學教師の熱心なる研究を村民に教へたために、養鷄の業一村に傳りて、毎年數萬圓の收益を收むるに至つたところや、副業のために一の大なる組合が成り立つて、非常なる取引と純益を上げてゐるなどの例が少くないので、これを歐洲各國で見れば、なか〳〵盛んなどを見出すのである、中には鷄卵を送り出すために、特別列車を仕立てるまでに、盛んになつてゐるところもあり、デンマークの地方では、產業組合を奬勵し鷄卵の種類品質を檢査し、共同荷造の方法に

まつてゐるが市場に賣り出し、更に輸出品の主なものゝ如きもある。又瑞西の農村に於ける、各季の副業は、木材の彫刻多きを占め、一年間およそ、一千萬圓を收め、セヲタの各州に行はるゝ副業は、總ては四十三種の多きに亘つて、一年の收益五千萬圓に達すと言はれてゐる、又ホンヂンスルヒの小王國の商務局總裁スタイン、バイスと言ふは深く副業について考へ、倫敦の大博覽會に於て細かに他國の工藝品を觀察し、之に由て、農村に副業を奬勵したので、農民が餘暇に作つた、毛氈、「ブランネル」「リンネル」指物細工、藍細工、蒲團、家具、帽子の類は、續々英國に輸出せらるゝようになり、今では「我が國に於て一の貧民を見ることは能はず」と言はれるようになつたそうである。

又伊太利の山間の僻村にセンヂグアーといふ地があるが、そこにストラヴンシと言ふ工學者があつて、其妻女の夜業の縫針の運かも考へに、自ら裁縫家となり、そのうへ、近所の男女に傳習させたので、完全となり、夜間レース編みの副業が盛大に行はれるようになつて、それが、たゞ婦人はかりがやるでなく、男子も亦妻子姉妹と共に樂しく談笑しつゝやるので、知らず〳〵大きな成績を擧げてゐるそうである。――（以上外國の例は井上友一氏の說による）

斯樣によき例は、いくらでもあることでもあるし、且我國には、殊に機業も盛んであり、蕞細工、經木細工、草花、果樹栽培タオル、ハンカチーフ、風呂敷、手袋等の編物なども出來ることであれば、どうかして、盛んにしたいものである、ついては青年會などが、中に立つて材料の供給製品の取集め、及賣買の世話をすれば、眞に鄕村の發達をすゝめるはかりでなく、青年會の收入の道も出來るのである、これまで、この見易い副業も、中に立つて世話する人がないため、僅かのものゝ捌き方がなくて

却つて困るといふ有樣である、幸はして副業が盛になれば、家業の閑な時に婦女子が遊び暮して、悪い方に流れ易い弊もなく、まして夫や青年が出稼地で身を粉に碎いてゐるのに、家では只々妻子が遊び暮してゐるようでは、あまりに情ない話でもある、そして農家が豐たかになれば、今頃のように、小さな田畑を眺めて、小作をしては食ひ込むし、さてせないでは食れぬし、まして二男三男の片附け方をどうしようとかの心配をせぬでもよし、又青年時代より、二男三男に生れたのを、かこつて、行末を思ひ煩はせることもいらぬであらう。何を言ふても、日に月に進む世の中で、生活も高くなるのに、昔のまゝの收入を、あてにしてゐてどうしようか、苦しくなつて來るは、あたりまへである。それをみす〳〵苦しんでゐるようでは、あまりに時代遲れな、考のない話しゝか思へないのである。自分のためでもあり、國の進運にも大なる關係のあることゆゑ、よく考へて貰はねばならぬ。

なほ一般の人が副業と本業とを取ちがへて大仕掛けでやらねばおもしろくない事のように考へてゐるかも知れぬが、副業の盛んな所を見ると決してそうではない、只僅かづゝながら、多くの家々で揃つてやつてゐるので塵も積れば山となると言ふような具合であるからここに目をつけねばならぬ。

(六) 統計

我が國の人は、大體統計的の智識に乏しくして、一般有志も統計に就てあまり考へないで、むしろ粗末にする弊があると言はれてゐるが、却々大きな關係のあるものである。

筆である。

何を言ふても、人を、自覺させ、發奮させ、後悔させ、行末を慮らしむるも

のは、統計の如きが最も有力なものである、これを考へてゐる人は、地方に若少もはなく、自費を以て印刷したものを配布し、扇子に印刷して與へた人さへある、まして村長の作る年度決算の報告の如きは、極めて有効に活せねばならぬ、統計の一二を擧げて見る。

一、世界各國富の比較及一人當りの比較、一、貿易額比較及一人當りの比較、一、生産力の比較、一、貯蓄の比較、

一、組合事業發展概要、一、公德人智の進歩の狀況

一、事業經營の進路、一、國民生計程度比較、一、交通運輸便否比較、

一、外國貿易趨勢、一、農民勤勞の効果、一、自治發展一般、一、畜生統計、一個人と社會と國家との關係、一、出産死亡統計、一人口統計等

これ等は、注意さへして居れば、新聞雜誌、官廳報告書等より澤山の材料を得ることが出來るし、又立派に出來てゐる紙繪なども澤山ある、それで小學校備へ附けのものを寫したり、又は各自が面白く考案したりするもよい、殊に手分けして、鄕村の統計を取ることは極めて重要である。斯樣にすれば、どんな頑迷な人々でも非常に感じて所謂發奮興起の色が顏に表れるから、其機を外さず、畳みかけて說き勵ませば、非常の効果を擧げるので、手を代へ品をかへて、勵ますうち遂には著しい進歩を見るに至るのである。

(七)　産業組合

地方殊に農村の振興に最も効力のあるものは、この産業組合であると して、到る處に其設立を見、今では既に四千有餘の組合が成り立ち、二千五百萬圓の資金を算すると言ふ有樣で、ます〳〵發達しつゝある。まことに今のやうな、資金は多く都會の僅かな富豪の手に集つて、下のも

のほど、ますく〳〵資金は乏しくして、却つて高い利子を拂ふか、それでなければ、事業に手出しをせぬと言ふことにしなければならぬ。これでは、この日に月に進む、生活し難い世の中に於て、ますく〳〵富豪と貧民の隔てが、ひどくなるわけで、どうしても放つて置くことは出來ぬ、遂には世の圓滿を缺いて、情ない亂れを起すこととなることが、既に推し測られるのであるから、今より之を融和してます〳〵圓く行くようにするのが、そもく〳〵青年會などの及ばすながらも、力を盡すべきところであらう。この產業組合については、世上澤山の著書も出てをるし、到る處に實驗家があることであるから、よく〳〵取り調べて貰ひたいので、こゝでは其大體を言ふて見るのであるまで、其効果について言はれてゐる例を擧げて見る。

念ふに獨逸に於けるライファイゼン式の（ライファイゼンなる人が創

めたのである）農業信用組合は相互の信用に依りて成り立ち、相互の利益を保證するを主なる目的とす、それゆゑ一たび之が組織せられると其地の訴訟事件も、ために減つて地方の貧民院（貧しきものを救ふところ）が忽ち閉ぢられた事實は（いらなくなつたことは）ウエストファレンの原野に於て、數々見る所であつた、この一事は深く隣國埃太利の議會を動かし、議會は、直ちに同國農民に向つて、亦之が奬勵策を一決するに至つた。英國農民のために熱心信用組合の必要を唱道して已まぬ、ウルフは嘗て親しく、獨逸ライン地方なるムルハイムといふ一農村に到つて、委しく視察した、同村は嘗て猶太人（金貸しを一つの樂みとしてゐる、慾の深い人種）の跋扈（ばっこ）つてゐた所で、農民は借金のために苦しみ、田畑は荒れ廢れ、竟に見る影もない、寒村（ビンガーハム）と成り果てたのであるが、一たび共同組合の成立つて以來は肥料の改良も行はれ、排水の方法も具はり、花

關係諸君に田野は豐饒に、英國の農民が決して勝來することが出來ぬと、言ひ切つた熱氣の打來機械すら已に組合資金の利用によつて、購求められてゐるのを見るやウルフは深く之に感動し、歸國するや書を著して世人に示すに當り銀行專門家の所說を引用してライファイゼン式共同組合の長所を說明して言ふには、其組織は簡略を尙び、貸付は個利なり、利益の配當をせず、其區劃を一村落に限り積立金の使用を嚴禁す、敎會と牧師とは、よく外部より組合を補助し組合員各自は責任の觀念を喚起し、獻身的精神を振ひ皆類る所なき農民を滑はんとする、慾望の心を持たぬものはない」と云云（この一節は井上博士の說による）

澤山の人々が集つて、一つの組合を組織し、參少し宛の金額を出し合ふ、組合の株をこしらへ、之を資本として、組合員に限つて融通所は組合員の保證ある人（信用者に當めた、稻庭内に於て商業に要る資本を融通し、時は組合員の物品を一まとめにして賣るとか、組合員に必要な品を一度にまとめて買入れて分配し、又は組合で簡單所を設けなどして互の利益を計つた上、相當な利益配當をする仕組である。其方法をまとめて言へば、

一、種類　信用組合、販賣組合、購買組合、生產組合。

一、責任　會員が負ふので三通りある、第一が無限責任として、どこまでも、責任をもつてゆくもの、第二に有限責任として自分の持ち株だけの責任しか持たぬもの、第三は保證責任として、負債があつたら組合の財產ですまし、すまぬ場合には、組合員は、株金の外に、定めた額だけの金額を出し合ふもの。

一、役員　理事（期間三ヶ年）監事（期間一ヶ年）を選擧する、但し組合は七人以上の組合員がなければ、組織することは出來ぬ。

(イ)**信用組合**　組合員は産業上の資本を資し附け、又は組合員から、金錢を預かつて、其便利をはかるを目的とし、其資本は、前に言ふた組合員の出し合ふたつまり株金をあてるのである。

上手に運轉して行けば、僅かな資本で、大きな融通がくる〳〵と數多く出來るし、又五年なり十年の後には、必ず、目に見へて來るのである。

(ロ)**販賣組合**　組合員のこしらへた、物品を其まゝ、又は、それを原料として猶一層良いものを製作して賣り捌くのを目的とし、組合は賣上高に應じた手數料を收め、組合員は自分の製造品を組合に渡してしまへば、餘計な掛け引きや、心配が要らず、金の要るときは、賣れるまで八掛(八割)までの前借が出來るから、金に困つて投げ賣りするような事なく、品が紛失したり、損じたりしても、組合員が平等に分配して負擔するし、其上、組合利益の分配があるのである、近頃盛んに唱へられてゐる米券倉庫もこの一種である。

(ハ)**購買組合**　組合員が、日常用ふる、器物、食料、或は製造物品の原料などを、一手に購入れて、賣り渡すので、組合は相當の手數料を得るし、組合員は、安くして良いものが手に入る上、組合利益の配當を受けるのである。

(ニ)**生産組合**　これは、使用組合とも言ふて、組合員の製造した者に、猶手入れをなし、又は土地や器械を買ひ入れ相當な設備をして、組合員に使用させるが目的である。

組合は使用料を收め、組合員は僅かな資本で、立派な場所、器械を使用することが出來、餘計な資本を自分で出して、寢させて置かぬでもよい、その上に、配當を受けることが出來る、この仕組は劃合に大仕掛けな、製造が出來るわけである。

まあざつと、こんなものであるが、これを小くしても、散髪器、風呂、雨傘、枡秤、車、釜、莚などを備へ又は種々なる見本、苗、種子などを配ることも出來るし、戸毎に果樹を植ゑ、接木して廻るなどもおもしろい。これ等も、矢張資本の大きいよりも組合員のお互に責任を重んじて、約束を守り器具を大切にするなどの道義をつくすと共に、之を治めてゆく、役員有志の熱心が大切である、そしてこの組合の精神を向んで行ける道を進んで行けば、自ら勵みも出てます〳〵確かに而も富裕になつて行くのであるが、むやみに旦那さんにたよつて、あまへてゐると、つひには、とんだ目に逢ふので、現に信用組合をやり損ねたために、却つて旦那さんなる人の一人持ちになつて、組合員は家も屋敷も取り上げられた如き、哀れな例は少なくないのである。

(八)品評會

今日到る處に、大きくは博覽會より小さくは、學校生徒農作品の品評會まで、盛んに行はれてゐる、それだけ、肝要な、なか〳〵効果のあることである。まづ地方では、其地方の生産物を何から何まで一つ場所に集めて陳列して一般の人々に觀覽させ、そして其道に委しい人々が、一々出品を審査して、好く出來てゐる品に等級をつけ、相當の賞品を與へる催しである。

斯樣にすれば、出品人は自分の品と、他人の品とを比較して、互に良い點を學び、又世間の人々に觀て貰ひ且品評して貰へば、勵みが出來るし、自ら賣口が多くなるわけである、又世間の人々にしても、澤山の品を比較して最も出來が善い上に、割合經濟な品を買入れる事が出來るのである。それ等が自ら世の進歩産業の發達を來すこととなるのである。

しかし注意すべきは、品評會物と言ふて、費用も厭はず、時間をかけて、ま

るでニワカの見世物的な出品をなさぬやう、又審査を極めて公平にし、もし怪しまるゝ如きものは、賞品授與の時説明するがよい、不公平とか、なんとか、つまらぬことは、なくてさへ言ふ位であるから。怪しいことのために隨分ひどい評のあるなどは、よくある事で、苦々しいわけである。又呉漫に賞品を授與せぬで、注意事項は委しく一般に説き聞かすがよいのである。また、農産物の品評は其農作地をも共に審査して見るがよいと思はれる。

斯様な次第であれば、郡とか町村とかの催しは、あつても別に青年會として祭日とか、記念日とかに開き、前以て一般に、ふれておけば、婦女、子供までが折にふれて、いろ〳〵な思考をこらして、隨分長い樂日となり、當日は有益であり、且滑稽なものが陳列せられて、おかしくもありで、なか〳〵賑しい事であらうと思ふ。

(九)　博物場

青年會場の一室、又は都合よき室を準備して博物展覽場となし鄉土史の記念となるもの品評會の優等品等あらゆる生産物、天然物等を集めて一般に隨意參觀をゆるし、研究の資料とさする事は肝要の事業で、時には、責任を以て、名家の古器物、書畫を陳列して一般に觀するなどは、極めて肝要なことである。まづ一般が興味をもつて、珍らしいものの納め場所として、いろ〳〵なものを持つて來るであらうし、そのうち自ら鄉土に就ての趣味も出來る、ましてや、百の説教よりも、目の前に實際のものを見せるのであるから、實物指導、即ち生き學問をする事となるわけである。

第五章　娯樂

遊び樂しむを好むは、生きものゝ天性であるから、まして人間は昔より其の社會相當な遊びの機關を設けてゐるのである、どうしても、働く一方では休むと言ふことの必要なるは勿論であつて、ましてこの激しい世の中であれば、日日の勤勞に勞れ飽んだ、人の心を慰め清新な心神を養ひ更に生き返つて、再び勤勞に進ましむると言ふ事は、何人も必要と認むる所である。

ところが注意すべきは、およそ好む處は遂に溺るゝに至るもので、却つて遊逸の風を生じ、不良の遊樂にまで手を入れることになるので、其誤りは悲慘な結果を生むのであれば、特にこの點に注意して、豫め備へる所がなくてはならぬ。

一、娯樂最高の理想は勞れし人心を慰めて清新ならしむることにある。

一、高尚なる趣味なきものは徒らに卑俗に流れ、いよ〳〵迷ひてますます害を逞しくする。

一、そこで品性の向上と言ふ點に効果あるものを選ばねばならぬ。

一、高尚なる趣味には入り難きも、一度入れば益々眞味生じて、飽くことなく、隨て自ら風敎の善に導くの便を加ふるはずである。

一、娯樂より導く道德は、少しも形を表さずして、却つて入り易く且、深き印象を與ふるものである。

一、娯樂は大なる勢を以て流行し易きものである。

一、娯樂は長幼相和し四海兄弟の交りに入らしむるものであると共に秩序を亂し易いはずである。

一、勤勞を重ずるほど娯樂は趣を加ふるものである。

一、ジユポンは「社會のため娯樂の事業を完成するは、一國の文明を進むる最上方便の一なり」と言ふてゐる。

斯樣なる多くの理由は、大に娯樂を奬めてゐるのである、ことに青年會の如きは、最もこの點を先にすべきもので、實際に於て娯樂によりて會員を集め、追々精神的の話を吹きこむことに於て、奏効の早道であることは多くの人の經驗するところであらう。そのために費したる費用は、更に大なる利益を生むゆゑに、經濟の上に於ても重んずべき事を考へ、且又娯樂に親しむことを以て、子供らしきとか、下品なりとか考ふるつまらぬ風を改めねばならぬ、娯樂によりて品位を下すようなものは四角張つてゐても人の蔑しみを受けるに遠ひない。娯樂はどうしても、在來のものを改良し選擇するを主とし、更に新しきものを採るの順序をよしとするのである。

(一)　運動に關するもの

一、運動會　競技會、聖競會とも區別するが、兎に角平常樂しんでゐる娯樂を、公開して鄉人と共に樂しむので春秋の休み鎭守祭日、記念日、盂蘭盆會、小學校運動會日等に於て催すのであること勿論、最も適宜の機會を選むがよい、其競技種類は、

武的　擊劍、柔道の試合、角力、銃槍、紅白試合、水泳、土器割り、兵式操練

徒歩競走、競馬、自轉車競走、消防演習など、

農的　俵運び、藁細工競爭、肥料桶運び、伐木競爭、俵裝(俵一ばいの短い繩をもつて)製束競技、散亂せる薪繩等の整頓、漕舟、曳網競爭、非常救援(整裝、溝飛び、幅飛び、高飛び、荷物出し等)

學術的　暗算(所々に同一の數を連呼するもの立ち、競爭者はこれを聞きて走る)書取、目方換算、珠算、決算などの類。

其他　小學兒童のするものゝ如き。

準備　優勝旗、徽章、音樂隊(笛、太鼓、ブリキ鑼、鐘、金屬製具、月琴の

類にして、幕の中にて、滑稽の表はれぬようにするがよい。褒飾(寄附の花火、綠門、小旗凡そ六百枚、幕賞品(學用品、日用品、滑稽なる品物)

二、擊劍　尙武の精神を養ふ、鎌鉈鍬の手棟を磨き、臍据はり、音聲肉附き、姿勢整正等について効あるがゆゑに最も採るべきものである。費用は、道具一式拾貳圓より拾五圓まで、竹刀はなか〳〵よく折るものであるそれは、横なぐりにするからである。

三、柔道　よい師範者があればよいが、なまじ若い人が只變則的なことを教へると生兵法をやりたくなり、且氣を負ふて人を侮る如きこと等多くの惡例のあることであるから注意を要するのである、費用は稽古衣二着で五圓より六圓位である。

四、徒歩競走　山坂、平野の競走マラソン競走の大流行の有樣手輕であつて、なか〳〵面白いものである、散紙競走もよい、しかし心臟、肺臟の弱きものを強いてはならぬ。

五、角力　手輕で、無邪氣で、おもしろい、青年會場の前には、土俵を設けてよい、風俗壞亂的のことをやるのは排すべきことである。禪の確かな大きなものを準備するがよい。

六、庭球(テニス)　當分は學校で貸してもらふ。費用は約拾壹圓。

七、ピンポン　費用約壹圓五十錢。

八、野球(ベースボール)　學校でやるはよいが、場所が狹かつたり、子供が眞似て往來で人に棒をあてなどよくすることで、注意を要す、間似合の球やら木片でやれば手輕である。

九、鐵竿　最も都合よくて爲になるものであるから會場には非是設けて置きたい。費用約壹圓。

一〇、鞦韆（ブランコ）　費用約貳圓四拾錢。

一一、弓術　よい場所や道具や師匠が揃へば結構であるが。

一二、遊動圓木

一三、滑降棚

一四、射的　在鄉軍人などは殊に練習するがよい、二年の兵役になつてからは猶更である。

一五、銃槍　首だけには注意するがよい、費用約十五圓。

一六、馬術

一七、回轉車　費用約三拾圓位よりある、會場に備へて置き貸料をとればよい、田舍にては急用の時に殊に必要を感ず。

一八、體操　兵營より材料の拂ひ下げをうけ又は敎官の出張を乞ふてあるところもある。

普通兵式共盛んにやつてほしい、月夜などは殊にはろしい。

一九、消防演習　休みには應行して、戸主軍、女子軍、少年軍をも設けたい各の任務がそれ〳〵ある。

二〇、試膽會　手輕で、愛嬌のある、恐ろしいだけ面白い、有益な事である、只其方法に注意するがよい。

二一、功試し　手輕で、實用的であるから、どし〳〵やつてほしいが無理をして、こばり死にをしてはこまる。

二二、押棒　膽が据わり、腹のしつかりしたものが案外強い。

二三、參籠、枕引

二四、說、座、指、足の角力。（板の上がよい）

二五、說引の類其他

（二）音樂に關するもの

一、音樂演奏會　第二章第六節參照。

二、音　樂　隊　費用約參拾圓。

三、尺八、明笛、銀笛、吹風琴。

四、手風琴、月琴、ハーモニカ。

五、太　鼓　祭りの節は保存したい、勇壯にやるがよい。

六、吟　詩　俗歌改良參照。

七、唱　歌　同上。

八、俗　歌　同上。

九、謠　曲　同上。

一〇、琵　琶　歌　同上。

(三)　踊に關したるもの

一、劍舞　志氣の振作、擧動の精練、古時及歷史の玩味等に益することが

多いと思はれる、やるがよい、しかし大にやるがよい、赤心をこめてやらぬと、いかぬ、勇壯なるものは勇壯に、優美なるものは優美にやるべく、つまらぬ役者旅藝人のようになつては、他から侮られる笑はれる、けれども劍舞そのものは決してつまらぬものではない、支那の昔の歷史には澤山例のある事であつて、我が古い歷史にも少なくはない。さて其方法であるが、今では相當の書籍が出來てゐるから買ふて讀めばよいが、自分で考へてもよい、又何も手本通りせなくてもよい、それ相當な態度をして、間をうまくつづくれば、自ら立派な劍舞となるので、なまじ藝を多くして却つて厭やな感を起こさしてはつまらぬ。

二、仁輪加　決して笑ふべきものではない、座興としては捨て難いものである、昔し流の卑猥なものは、飽くまで排けるようにしなければならぬ。しかし其目的は矢張座興にあれば、やるからには、遠慮なく大

勝にやつてのけなくては死んでしまう。仁輪加づきのものは、山へ行つても、海へいつても、種々な種を見附け次第休憩の時に、自分で仕組んで、ちやんと二つや三つは、いつも用意しておくようであればおもしろいと思ふ。

三、盆踊　今最も議論のある娯樂である、多くの青年團は廢してゐるようである。踊り其ものは、優雅で、洋式舞踏の流行する今に於て、たしかに日本的の價値は充分あるけれども、多くは女子の踊りであるように思はれる、堂々たる青年にはもつと〳〵勇壯なものを撰びたい。女子が在來の踊りをやるならば、どうか奬勵して保存したいものが少くない、女子のためになるはづである。

田式な組野な態度優雅にして、其情的方面を陶冶して、其歌詞を選べば、更に道德を進める方便となる。

廢する原因は、男子の柔弱な眞似を厭ふのと、踊のために、從ふておこる男女關係不潔なると、健康を害する點である。

踊に情的方面が興奮してゐるところへ、更に卑猥な調が出る、文句が出る、それを聞いて、若い男女の眷が眺る、ところは暗い夜の幕のうちであるし、人々互に寄り添ふてゐるがゆゑ、異性の香ひも殊更強い、つい人情の淺ましく、つまらぬ情に走るのである。

そして一年の中に於て、つまらぬ關係を生ずる機會をつくるので、他の場合は案外男女關係は明白である、この踊の晩が年中の禍源をなすわけである。もし踊るなら、場所、文句、時間を選み、風紀係などは拔目なく活動するがよい。

今少しく男女の交際が正しくなつて來れば、案外害はあるまいと思ふが、今の狀態では、もし他に何かよい催しがあれば、そちらをやつて、

踊は其の都に入れて、何が都合よくやれはよいと思ふ、盛會には、人々が遊んで、腹をふくらして居るからとか、消化を助くるためであるとか、又は踊の衣裳をこしらへたさに、平常よく働らいたとか、郷民圍繞するとかの理由は、他のもつと〳〵よいもので補はれる、何も踊りに限つてはゐない。

踊りを止めると、昔育ちの人々が、余更名殘惜しい感じをするであらうと思ふが、時代は進歩する、それ程け人も進んだ遊びをするがよい。

四、芝居　他にまだ良い遊びのないうちは、芝居もなくてはあまり、田舎の興を殺ぐ迄あらう、けれども青年が女の眞似をしたりなどするは厭やなもの迄ある、役者を雇つて、盛人にさせるがよい、藝を御び神聖であるが、藝が擅恥でも差支へないと言ふまでは現の世は進んでゐないと言ふ事である、それを地方青年が改良などと騒いでは馬鹿々々しくなる。

芝居の弊は、善いものゝ、卑俗なものは、悪い方面迄喜んでつまらぬ事を學ぶにある、ましてや卑しき不潔なる旅役者を尊敬して、銭も知らぬ子女までに崇拜させると言ふ、恐ろしき風を放つて置くようでは危険な話である。

五、撃　改良して新奇なものをやつたらよからう。昔來のままである監督者がしつかりしてゐるか、青年會のある程度にまで發達してゐるから、やつてもよかろうと思ふ、こんなものを無理にやらんでもよからう。

(四)其他

一、講演會

一、討論談話會

一、遠足
一、特別講義
一、探檢
一、圖書閱覽
一、試作田
一、圖畫
一、善行美談
一、かるた　在來の百人一首もよいが更に進んで、櫻がるた、常識がるたを使ふがよい、櫻がるたは、八は武士花は櫻の大精華を世に傳へんため、忠臣義士の詠歌を集めたものにて、常識がるたは、常識を養ふに資するために問と答とを上と下に分けて組んだもので、いづれも自分々々で作るが宜い、買はうと思へば、出來てゐるのもある、序だから、常識を平たく言ふて見ると常識とは、世間で適當と認めてゐる智識であつて、人並に持つてゐるべき知識で彼の小數の學者の言ふ學識と比較したものである。數が多ければ別々にするが至極好結果と思ふが一所にしてもよい、次に二三の例を擧げて見よう。

修養

心だに誠の道に叶ひなば　祈らずとても神や護らん
憂き事のなほ此上に積れかし　限ある身の力ためさん
香もなく香もなく常に天地は　書かざる經をくり返しつゝ
秋の日は山の端近し暮れぬ間に　母に見へなむ急げ我がこま
山は裂け海はあせなん世なりとも　君に二心われあらめやも
花咲かぬ身は靜なる柳かな　雨もにくまず風も恨まず
底ひなき淵やはさわぐ山川の　淺き瀬にこそ仇浪はたて

勤勉のなる勤勉は誰もする　ならぬ勤勉するが勤勉

十日に十里の道をゆくよりも　十日に十里ゆくぞたのしき

上見れば及ばぬ事の多かりき　笠着てくらせ世の中の人

下見れば我に優りしものはなし　笠とつて見よ空の高さを

今朝もまた朝とく起きて眺むれば　窓にうれしき有明の月

急がずば濡れざらましに旅人の　あとより霽るゝ野路の村雨

足るを知るものは富めりといふことを　さとりてぞ世は樂しかりける

其他格言、俳句、狂句類

法政

我が皇室は　萬世一系

内閣　十省

我が憲法は　欽定憲法

我が政體は　立憲政體

適齢届　十月中

○㊞郡長　何某殿

○㊞縣知事　何某殿

總理大臣　何某殿

入營期日　十二月一日

委任狀稅は　貳錢の切手

普通の手形稅は　參錢の切手

千圓以下は　五錢の切手

小爲替料金　五圓まで五錢

通常爲替料　十圓まで六錢

電報爲替料　十圓まで三十錢

暦　五月の三日(毎年變る)
　八十八夜は　九月の二日(毎年變る)
　二百十日は
數
　十五の五倍は　七十五
　一メートルは　三尺三寸
　圓周率は　三、一四
　正比のねうちは　同じように變る
　反比のねうちは　逆さに變る
　元高を出すには　歩合高割歩合
　歩合を出すには　小(歩合高割る大(元高)
　歩合で百圓の一圓は　壹圓
　利率で百圓の一圓は　拾錢
　日歩とは　百圓につき一日の利子
衛生
　三度の食事は　腹八合に
　食事の前後は　暫く休め
　日の照るところに　黴菌は棲めぬ。
一、手　品
一、幻　燈
一、蓄音器
一、活動寫眞
一、懸　賞

まづざつと大體を列記したのであるが、元來娯樂なるものは、人の第一

の目的ではなくして、勤勞につい
せない人には無用である、その人
伴はぬ娯樂は害ありて益はない。
又勤勞を樂しむ人は比較的に娯樂
娯樂化するであらう、しかし、前
を要するはづで、其利益も相當に
も必要である事を考へて決して食
兎に角娯樂は第二のものであるが
つて撰ぶべきもので、今何れをこ
會としては、十分に研究して、最
なほ心すべきは、其娯樂を見て其
世に影響する力は輕々しく視ては

て、必要の生ずるものであるから勤勞
人はまづ勤勞するがよい、むしろ勤勞の
娯樂を樂しむことが少い、むしろ勤勞を
にも言ふた如く、人には必ず相當の娯樂
にあるうへに、一家團欒、社會交際の上に
て食はず嫌ひに陷いつてはならぬ。
るがゆゑに、其職業、社會の狀況、時節によ
こうと定めることは出來ない、要は青年
も適當なるものを撰ぶがよい。
其世の狀態も察することができるし、其
てはならぬ、ゆゑに、文明に進むに隨て進

歩的のものを採るようにせねばなら
を存して置いてはならぬ。
けれども亦娯樂を小兒の業とばかり
と遊んだからとて、名譽を損ずるはづ
邪氣に遠慮なく樂しむがよい。た
且娯樂のために、威嚴を損づるが如
じめ振つてゐる方が他人より見て、
こらはよく考へて、判斷を誤らぬや

ぬ、徒らに舊來の惡影響あるもの
ばかり考へてもいけない。大人が小兒
るはづはない、娯樂は矢張娯樂として無
もたゞ下品に落つるは排すべきことで、
きは、つまらぬ人物で、むしろ、くそま
見て、おかしく輕く見へるはずである、こ
うにしたいものである。

地方青年團體の組織及事業　終

附錄

青年團規十二則

明治四十三年四月二十六日名古屋市に於ける全國青年大會に於て、內務文部兩省と協議の上、青年團員の確守すべきものとして決議せしもの。

一、敎勅奉語並に戊申詔書の御趣旨を奉體すべき事、
二、忠君愛國の精神を養ふべき事、
三、國體を重んじ祖先を尊ぶべき事、
四、克く父母に仕へ、一家和合を圖り、身を修め家を興す事、
五、常に自治團體の一員たるを忘るる事なく、先輩を敬ひ、隣保を愛し、鄕里のために力を盡すべき事、
六、業を勵み產を治め、國力の增進を心懸くべき事、
七、職業に必要なる知識技能を補習し、益世の進步に遲れざらん事を心懸くべき事、
八、心身を鍛練し、勤勞を愛するの習慣を養ふべき事、
九、互に善行を勵み風紀を正しうし、善良なる鄕風を作ることに心懸くべき事、
一〇、質素にして分度を守り、進んで公益を廣め慈善を行ふべき事、
一一、一致協力の習慣を作り、公共のため有益なる事業を起さん事に心懸くべき事、
一二、公衆衛生を重んじ、各自の健康を保たんことに注意すべき事、

實行すべき要目

實行すべき要目

一、力を地方產業の進歩に致し、專門家の指導を受くるに勉むべき事、
二、樵林を爲し、又果樹野菜を栽培し、其普及を圖るべき事、
三、業務の餘暇を以て補習教育を受くべき事、
四、學校教員又は先輩の講話を聽き、有益なる書籍を閱讀して智德の修養に力むべき事、
五、營造物及公共の財產を愛護する事、
六、青年團體の公共作業は他の模範たらんことに心掛くべき事、
七、青年團體の資金は其自營する仕事の收入に依り之を造り、濫りに先輩又は他の團體の助力を求むるの風を避くべき事、
八、青年團體は質德の修養と產業の振興とを以て主眼とすべき事、
九、外來人のために標物を設け道路を修繕し路傍の標木を立つる等往來の便宜を圖るべき事、
一〇、神社佛閣は勿論昔の賢人鄕里の先輩並に戰沒者篤志者等の遺蹟墳墓保護に助力すべき事、
一一、青年文庫を設くる場合には、學校の教師に謀りて有益なる圖書を撰擇する樣注意する事、
一二、鄕里の耆老及び功勞者を敬ふことに勉め尙齒會表彰會等の開かるゝ際には自ら進んで、斡旋の任に當り、懇切なる世話を爲すべき事
一三、善良なる氣風を作り其維持を圖るが爲め團員互に相戒め、適當なる制裁を設くべき事、

明治四十四年十二月五日印刷
明治四十四年十二月八日發行

不許複製

著作者　徐原祿次

發行者　增田義一　東京市京橋區南鍋町十二番地

印刷者　渡邊八太郎　東京市牛込區矢來町七番地

發行所　實業之日本社　東京市京橋區南鍋町十二番地　電話銀座八七五番　郵便振替貯金口座三二六番

印刷所　日清印刷株式會社

野田叱電君著

成功實例 青年立身訓

定價參拾錢郵稅四錢　五版

一事に通し、一業に達するには必ず人の知ざる苦心あり。従来の作文には一定古慣ありて自由に出来ぬ者は皆必ず人の知ざる苦心あり。従来の作文には一定古慣ありて自由に出来ぬと勉強とに依る本書は成功者の實例を列舉して以て青年の爲めに成功修養の途を教へたるもの也。

高須梅溪君著

新體時代普通文

定價五十錢郵稅六錢

能はざる不便ありたるも高須先生の多年是の不便を除かんと苦心し今漸く本書を出せり論文、日記文、傳記、候文等に於て一々作例を示して懇切に説明をなせるが故に如何なる初學者も直ち達文の士たるに至る

カーネギー著　伊藤先生譯

實業の鍵

定價參拾五錢郵稅六錢

カーネギー翁は一代にして身を立て今や米國に於ける屈指の大富豪なり。本書は翁が其の修儕たる所謂を説明し且つ實業界に身を立てんとする青年の爲めに金玉の教訓をなせるを伊藤先生に依て譯されたるものなり

五十日間に九版を重ねたる

新渡戸博士著 修養（定價壹圓七十錢郵稅十二錢）

青年必讀の書也

五十嵐次郎君著

最新商業算術

定價八拾錢郵稅再版

本書は多年教授に經驗ある五十嵐先生の考按に成れるものにして暗算法、同筆遷法等より古來内外商業上各般の慣習等を明瞭に説明し且つ重要項を表となし又外國貨幣換算法等に至る迄を附せるが故に極めて便利なるものなり

實業之日本社發行圖書總目錄

●史傳地理

●十大德教家傳　實業之日本記者石井研堂君著　山方香峯君著　大版上製美本　正價貳圓　郵稅拾錢

●米國史　若宮卯之助君著　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅拾貳錢

●偉人クロムウエル　ルーズギエルト原著　法學士遠山楯君山崎梅處君共譯　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

●新武士道　農學博士新渡戸稻造君著　山方香峯君著　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

●武士道實話　同　三宅雪嶺君著　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●近世人傑傳　山方香峯君著　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢

●人豪の片影　山方香峯君著　中版全一册　正價五拾錢　郵稅六錢

●當代の傑物　世界人　報知新聞記者佐瀬蕉雨君著　上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

●成功十傑　實業之日本記者石井研堂君著　米國最近　全一册　正價壹拾錢　美本　郵稅六錢

●偉人の少年時代　福田琴月君著　上製金文字入　正價六拾五錢　郵稅八錢

●世界偉人傳　福田琴月君著　大版伯序　大一册　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

●世界商業史綱　宮田千早君著　大版上製金文字入　正價六拾錢　郵稅八錢

●外國商業地理　中野親泉君著　最新　大版上製金文字入　正價五拾五錢　郵稅八錢

●滿洲處分　加藤政之助君著　大一册　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢

●渡清案内　長谷川宇太治君著　全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

●地理と商品　市吉徹夫君著　中版全一册　正價廿五錢　郵稅四錢

●天下の記者　三宅有賀田中館博士追悼文　大版伯序　棚田新鐵君著　大版正製　正價五拾錢　郵稅八錢

鈴木光次郎君著
●現代百家 名流奇談 全一冊 並製 正價廿四錢 郵稅四錢

幸谷克堂君著
●成功秘訣 富豪の面影 全一本 並製 正價五拾錢 郵稅六錢

實業之日本社編纂
●日本 富豪の家風 全一冊 美本 正價五拾錢 郵稅六錢

京都大學圖書館員 佐竹義繼君編
●幕末 勤王烈士手翰抄 上金文字入 製 正價壹圓 郵稅拾貳錢

前カワチン女學堂教頭 一宮操子女史著
●蒙古土産 大版上製 金文字入 正價八拾錢 郵稅八錢

◉經濟產業書類

專修學校法政大學教師法學士 工藤重義君著
●經濟財政要義 大版上製 金文字入 正價壹圓廿錢 郵稅拾貳錢

米國エルストン氏著 廬川忠雄君譯
●處世經濟法 中 全一冊 並製 正價廿錢 郵稅四錢

米國イリー博士 クキックソー博士共著
●經濟學提要 大版上製 金文字入 正價壹圓 郵稅八錢

米國センクス博士原著 別府丑太郎君譯述
●產業合同論 大版上製 金文字入 正價四十錢 郵稅八錢

商業學士小林行昌君 土屋長吉君共著
●中等經濟學 大 全一冊 並製 正價四拾錢 郵稅六錢

土屋長吉君著
●應用經濟學 大 全一冊 並製 正價四拾錢 郵稅六錢

淺井勝倪君著
●最新農業經營 大 全一冊 並製 正價四拾五錢 郵稅六錢

富入良衛門君著
●經濟的育兒法 大 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅六錢

カーネギー翁著 伊藤重次郎君譯
●富の福音 洋 全一冊 裝 正價四十錢 郵稅六錢

川上静兵衛君著
●衛生書類

醫師武藤喜作君著
●家庭應急手當法 中 全一冊 並製 正價四拾錢 郵稅六錢

報知新聞記者 中村木公君編
●名家長壽實歷談 中 金文字入 並製 正價貳圓 郵稅小包大錢

東京朝日新聞記者 杉村縱橫君著
●肺病全快談 中 全一冊 並製 正價五拾錢 郵稅六錢

農學博士 玉利喜造君著
●冷水浴の實驗と學理 中 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

法學博士 天野爲之君新著
●經濟策論 大版上製 金文字入 正價壹圓 郵稅拾貳錢

醫學博士加藤照麿君校閱 四谷龍顯君譯著
●最新育兒法 全一冊 並製 正價七拾錢 郵稅六錢

英國ノールソン著 海獄生譯
●思想健全法 中 全一冊 並製 正價廿錢 郵稅四錢

廬川忠雄君著
●心機轉換法 中 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

英國ウランヴキル博士著 海獄生譯
●簡易安眠法 中 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

英國ウランヴキル博士著 海獄生譯
●神經健全法 中 金一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

廬川忠雄君著
●頭腦明快法 中 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

英國ウランヴキル博士著 廬川忠雄君譯
●最新記憶法 中 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

醫學士 樫田十次郎君著
●衛生十二月 種 全一冊 參 正價二十錢 郵稅四錢

鴨涯親記者 中島氣岬君著
●禁酒禁煙の五年間 大 全一冊 並製 正價廿五錢 郵稅四錢

●商業實務書類

米國ウオルター、ヂー、ムッディー著　堀内新泉君譯
●新版商業算術　大版正價五拾錢　全一冊　郵稅八錢

金澤商業學校長中野親彙君編　島山親成君著
●實用商業文練習帖　和本習字正價六十錢　手本郵稅四錢

土屋長吉君著
●商戰必勝　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅六錢

土屋長吉君著
●商工執務法　大版正價五拾錢　全一冊　郵稅六錢

カーネギー翁著　伊藤重次郎君譯
●實業の鍵　大版正價廿五錢　全一冊　郵稅六錢

前金澤商業學校長　永野耕造君著
●商業修身訓　上中下正價四拾五錢　全三冊　郵稅八錢

中野親彙君著
●實用商業書信文範　大版正價四拾錢　全一冊　郵稅八錢

商業學士　小林行昌君著
●英文商用文教科書　大版上製正價四拾五錢　金文字入　郵稅六錢

カーネギー翁著　小池靖一君譯述
●實業の帝國　附錄正價廿五錢　カ翁評傳　郵稅六錢

カーネギー翁著　伊藤重次郎君譯
●富の福音　洋裝正價四拾錢　全一冊　郵稅八錢

男爵前島密序　澤村南池兩君共著
●實業指針　大版正價五拾錢　國民　全一冊　郵稅八錢

藤岡秀太郎君著
●商品と其荷造法　大版正價五拾錢　全一冊　郵稅六錢

憲崎貞夫君著
●生命保險提要　大版正價五拾錢　全一冊　郵稅六錢

市吉徹夫君著
●銀行と會社　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅四錢

土屋長吉君著
●商品と商業經營　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅六錢

土屋長吉君著
●最新販賣術　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅六錢

土屋長吉君著
●商業繁榮策　中版正價五拾錢　全一冊　郵稅六錢

土屋長吉君著
●最新商業要綱　正上製價壹圓五拾錢　各八錢　郵稅七十錢

土屋長吉君著
●簡易商業學　上下二冊　正價四拾錢　郵稅八錢

中野親彙君著
●最新外國商業地理　大版上製正價五拾五錢　金文字入　郵稅八錢

富田千年君著
●世界商業史綱　大版上製正價六拾錢　金文字入　郵稅八錢

男爵後藤新平君序　四村正雄君著
●最新事務法　袖珍上製正價六拾錢　金文字入　郵稅六錢

商業學士小林行昌君　下平精一君共著
●英國商業實務　大版上製正價壹圓廿錢　金文字入　郵稅小包十二錢

實業之日本記者　都倉義一君著
●最新式記帳法　大版正價七拾錢　全一冊　郵稅八錢

中野親彙君著
●增補改正單式簿記　大版正價廿五錢　全一冊　郵稅四錢

千代田生命保險會社會計課長　奥石平太郎君著
●利廻早見表　大版正價廿五錢　全一冊　郵稅四錢

近江屋質店員　奥村喜一郎君著
●新撰實業讀本　和裝全一冊正價二十五錢　美本　郵稅四錢

五十嵐次郎君著
●最新商業算術　上製正價八拾錢　金文字入　郵稅八錢

四岡英夫君著
●商賈と勘定　中版正價四拾錢　全一冊　郵稅八錢

中野親彙君著
●新案商業書信活法　大版正價五拾錢　全一冊　郵稅八錢

竹内正太郎君著
●商業簿記獨習書　全一冊正價七拾錢　美本　郵稅八錢

竹内正太郎君　村瀨芝君共著
●最新商業簿記　大版正價廿錢　全一冊　郵稅六錢

市吉徹夫君著
●地理と商品　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅四錢

朝鮮日日新聞社著
●百圓の小資本渡韓成功法　中版正價三十五錢　全一冊　郵稅四錢

桑谷克堂君著
●成功秘訣富豪の面影　全一冊正價五拾錢　美本　郵稅六錢

篠田鐵道君著
●小僧學問　袖珍正價貳拾錢　魏振假名　郵稅四錢

西岡英夫君著
●立身と繁昌　中版正價廿五錢　全一冊　郵稅四錢

在米　柿内藤一郎君著
●米國の商店　中版正價五拾錢　全一冊　郵稅六錢

◉修養書類

●品性の勢力　蘆川忠雄君著　ナ金文字入　上製　正價壹圓　郵稅八錢
●ルーズヴェルト全集　米國前大統領ルーズヴェルト氏原著　山崎梅嶺君譯述　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢
●自助の精神　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●新自助論　波多野烏峰君著　中版　正價五拾錢　郵稅六錢
●武士道實話　阿新三慶君著　編輯　上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢
●健全なる常識　波多野烏峰君著　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢
●沈着心修養　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●交際術修養　蘆川忠雄君著　大版　正價壹圓　郵稅八錢
●想　細口配天君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●默　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●日常の言語　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●奮闘の教訓　ルーズベルト氏著　山崎梅嶺、松宮宇一郎君共譯　大版壹圓　郵稅拾貳錢
●偉人修養の徑路　高須梅溪君著　袖珍上製金文字入　正價五拾錢　郵稅六錢
●奮闘吐血錄　雨宮敬次郎君著　中版　正價六拾錢　郵稅八錢
●意志の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●讀心術修養　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●克己心の修養　蘆川忠雄君　山崎清風君共著　大版上製金文字入　正價壹圓　郵稅八錢
●人格の光輝　江口岳東君著　大版　正價六拾錢　郵稅八錢
●樂天の勝利　獨逸マイアー氏著　波多野烏峰君譯　大版　正價四拾錢　郵稅六錢
●新時代の青年　實業之日本記者　岳洲生著（公開狀）　中版　正價四拾錢　郵稅六錢

●致育勅語要義　文學博士井上哲次郎君校閲　植村道次郎君著　大版　正價廿五錢　郵稅四錢
●快活なる精心　米國マーデン翁著　波多野烏峰君譯述　中版　正價廿錢　郵稅四錢
●人生の慰安　法學博士和田垣謙三君序　蘆川忠雄君著　大版　正價五拾錢　郵稅八錢
●常識の修養　烏田三郎君序　蘆川忠雄君著　大版　正價五拾錢　郵稅八錢
●實務才幹訓諫　男爵澁澤榮一君序　蘆川忠雄君著　大版　正價五拾錢　郵稅八錢
●人生の奮闘　男爵前島密君序　蘆川忠雄君著　大版　正價五拾錢　郵稅六錢
●人生の妙味　英國男爵エーヴベリ卿　ラボック著　正木照潤君譯　大版上製金文字入　正價八拾錢　郵稅八錢
●樂天の生活　伯爵大隈重信君序　蘆川忠雄著　大版　正價五拾錢　郵稅八錢
●品性の光輝　實業之日本記者　岳洲生著　中版　正價廿五錢　郵稅六錢
●心機轉換法　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢

●不平慰安法　米國トマス、ラーナンド氏著　畑内新泉譯述　大版　正價廿五錢　郵稅六錢
●觀察力修養　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●雄健の氣象　英國フヰリス氏著　蘆川忠雄君譯述　中版　正價四十錢　郵稅四錢
●自彊術　畑内新泉君著　中版　正價五拾錢　郵稅六錢
●決斷力修養　蘆川忠雄君著　中版　正價廿五錢　郵稅四錢
●勇者の世界　實業之日本臨時增刊　大版　正價廿貳錢　郵稅貳錢
●人格の修養　實業之日本臨時增刊　大版　正價廿貳錢　郵稅壹錢五厘
●人格の鍛錬　蘆川忠雄君著　中版　正價三十五錢　郵稅四錢
●商才修養の實驗　佛國大問屋主人ピヤール著　前田鉦嶺君譯述　中版　正價五拾錢　郵稅六錢
●青年立身訓　野田叱電君著　成功實例　中版　正價廿錢　郵稅四錢

●失敗の活用　中一冊　正價三拾五錢　郵稅四錢　實業之日本社編輯局員　波多野烏峯君新著

●自尊の修養　大一冊　正價八拾錢　郵稅八錢　高橋男序　實業之日本社編輯局員　波多野烏峯君新著

●座右銘全集　中一冊　正價壹圓　郵稅八錢　藤原楚水君編　先哲遺訓

●新國民の修養　上金文字入製　正價壹圓　郵稅八錢　淵岡名彈正君著

●奮闘の教訓　大一冊　正價壹圓貳拾錢　郵稅拾貳錢　ルーサベルト氏著　山崎梅處松宮孚一郎君共譯

●修養　上箱入製　正價壹圓　郵稅拾貳錢　農林學博士　新渡戸稻造君著

●獨立自尊　上箱入製　正價壹圓半錢　郵稅拾貳錢　慶應義塾々長　縣田象吉君著

●語學數學書類

●英語正確使用法　上金文字入製　正價六拾錢　郵稅六錢　高橋五郎君著

●英語熟達法　中一冊　正價五拾錢　郵稅六錢　高橋五郎君著

●英語句讀法　中一冊　正價六拾錢　郵稅六錢　高橋五郎君著

●代數難問詳解　上金文字入製　正價七拾錢　郵稅八錢　米國理學士大木新三君　鈴木精一君共著

●實用珠算教科書　大一冊　正價五拾錢　郵稅八錢　波邊總兵衛君　小里匡八君共著

●最新珠算全書　大一冊　正價廿五錢　郵稅六錢　高間　上田　中宮三君共著

●最新商業算術　上金文字入製　正價八拾錢　郵稅八錢　五十嵐大郎君著

●日清英會話　上紙函入製　正價壹圓　郵稅八錢　上海同文書院校友谷原專太郎君著

●英和俗語熟語故事大辭典　上皮正價四圓五拾錢　郵稅廿四錢　新渡戸、坪内、和田垣、三博士監修、實業之日本社編

●語學數學書類

●弦齋夫人の料理談　第一編二冊　正價各六拾錢　郵稅八錢　第二編　石塚月亭君編

●家庭日常の實驗　大一冊　正價四拾錢　郵稅六錢　報知新聞記者　天野誠齋君編

●家庭理科　大一冊　正價七拾錢　郵稅八錢　東京職工學校教諭　本間鍊次郎君著

●家庭應急手當法　中一冊　正價四拾錢　郵稅六錢　醫師　武藤嘉作君著

●刺繍獨習法　大一冊　正價廿五錢　郵稅六錢　女子高等學校講師　長谷川岩吉君述

●女子處世訓　三百五十餘頁　正價廿五錢　郵稅六錢　米國女學部考ベエン氏著　實業之日本社編輯

●日本料理法　大一冊　正價七拾錢　郵稅八錢　赤堀峯吉　赤堀菊子君共著

●折紙と圖畫　大一冊　正價廿五錢　郵稅六錢　京都師範學校教諭　木内菊次郎君著

●婦人のかがみ　大版上製金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢　報知新聞記者　中村木公君編　名流實話

●母の答　中一冊　正價廿錢　郵稅四錢　四谷龍顯君著　太郎の質問に

●母の書簡　前編四拾錢　後編五拾錢　郵稅六錢　正價九拾錢　郵稅八錢　堀内新泉君著　親に與へたる

●衣食住　大版上製金文字入　正價壹圓廿錢　郵稅小包玉錢　山方青峰君著　日常生活

●家庭菓子製法　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢　梅田壻菓君著

●婦人の重寶　大一冊　正價五十錢　郵稅六錢　四谷龍顯君著　婦人世界臨時增刊

●衣裳かがみ　大一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘　菊版　全一冊

●最新育兒法　全一冊　正價七拾錢　郵稅六錢　四谷龍顯君編著　加藤醫學博士校閲

●婦人の日常生活法　特別上製菊版　正價壹圓廿錢　郵稅拾貳錢　美本壹冊　村井弦齋君著

中島文學博士序　長野縣高等女學校長波多野市松君著

●子供の研究　大版上製　正價七拾錢　郵稅八錢

三輪田眞佐子女史序　阿部長暎君著

●健全なる家庭　中版　正價廿五錢　郵稅四錢

實業之日本社編纂

●日本富豪の家風　全一冊　正價五拾錢　郵稅六錢

日本石油會社會計課長　竹田常治君著

●實用家計簿記　大全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

婦人世界臨時增刊

●食物かがみ　菊全一冊　判正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

婦人世界臨時增刊

●婦人の慰藉　菊全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

婦人世界臨時增刊

●樂しき婦人　菊全一冊　正價拾五錢　郵稅壹錢五厘

木內菊次郎君著

●圖畫用紙細工　大全一冊　正價五十錢　郵稅八錢

白井悅子女史著

●家庭用衛生料理法　大全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

松葉靜和女史著

●造花實習　大全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

下田歌子女史著

●婦人常識の養成　大全一冊　正價壹圓五拾錢　郵稅八錢

秤石齋文雅著

●諸流盈石指南　大全一冊　正價六十錢　郵稅十二錢

讀賣新聞家庭記者　中村秋人君著

●兒童と鞭　中全一冊　正價參拾五錢　郵稅四錢

天野號齋君著

●家事實習法　大全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

米國婦人ウヰルコックス女史原著　山崎梅處君譯

●婦人の新修養　大全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

村井弦齋君著

●婦人及男子の參考　大全一冊　正價貳圓　郵稅拾八錢

木內菊次郎君著

●新手工科教授法　大全一冊　正價廿五錢　郵稅六錢

文學士堀田相留君著

●家庭教育の仕方　中全一冊　正價廿六錢　郵稅四錢

非上民子女史著

●烈婦美談大和撫子　中全一冊　正價四十五錢　郵稅六錢

村井弦齋君著

●少女讀本　大全一冊　正價壹圓　郵稅八錢

水村勉君編

●古流挿花の粟　大版上製　正價壹圓拾錢　郵稅拾貳錢

讀賣新聞家庭記者中村秋人君著

●幼兒情と保育　中全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

三津木春影君著

●皇帝少年旅行　中全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

讀見實業之日本記者東草水君著

●夏やすみ　中全一冊　正價四拾錢　郵稅四錢

波邊白水君著

●少女美談　上製　正價七十五錢　郵稅各八錢

下田歌子女史著

●婦人禮法　大上製　正價壹圓四十錢　郵稅十二錢

村田天鵬君著

●婦人の心理　大全一冊　正價六十錢　郵稅八錢

富谷、鈴木、田中、三君合著

●實用園藝全書　大上製　正價貳圓　小包料十二錢

◉處世書類

前田越嶺君著

●生存競爭法　大全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實川忠雄君著

●最良の機會　中全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

園田學吉君序　波多野烏峯君著

●紳士と社交　上製　正價七拾錢　郵稅八錢

ジョンソン氏著　山崎梅處君譯述

●向上的處世法　大全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實川忠雄君著

●日常の言語　中全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

ミラー博士著　波多野烏峯君著譯述

●光榮ある生涯　中全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

マシユース博士原著　江口岳東君譯

●處世術修養　大全一冊　正價壹圓二錢　郵稅拾貳錢

實川忠雄君著

●樂天の生活　大全一冊　正價五拾錢　郵稅八錢

實業之日本臨時增刊

●新時代の奮鬪　大全一冊　正價廿貳錢　郵稅二錢

實業之日本臨時增刊

●樂天的處世法　大全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

實業之日本社編纂

●成功座右銘　袖珍美本　正價拾六錢　郵稅四錢

男爵辻新次君著　波多野烏峯君著

●逆境離脫策　大版上製　正價壹圓　金文字入　郵稅八錢

米國エルストン氏著　實業之日本社編輯

●處世經濟法　中版　全一冊　正價廿四錢　郵稅四錢

波多野鳥峰君譯著

●處世の標準　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

英國リッチー氏著　山崎梅處君譯

●富豪實驗教訓　大版　全一冊　正價六拾錢　郵稅八錢

實業之日本臨時增刊

●同情の勢力　大版　全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

波多野鳥峰君著

●社會側面觀　上製　金文字入　正價七拾錢　郵稅八錢

實業之日本社編輯

●處世座右訓　袖珍美本　正價貳拾錢　郵稅貳錢

實業之日本社編輯

●成功錦囊　中版　全一冊　正價廿四錢　郵稅六錢

蘆川忠雄君著

●應對談話法　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

セロー氏著　波多野鳥峰君譯　樂園百面

●人生の眞相　中版　全一冊　正價四拾錢　郵稅六錢

米國實業ノ一ム翁著信　實業之日本社編譯　成功者の信條

●處世教訓　中版　全一冊　正價四拾八錢　郵稅六錢

米國ウヰルソン、ケース氏著（各の原著）　實業之日本臨時增刊

●英文處世教訓　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

●處世の金科玉條　大版　全一冊　正價廿貳錢　郵稅貳錢

河原春峽君新著

●處世經典　袖珍上製　金文字入　正價三拾六錢　郵稅四錢

四書精髓

◎雜書類

大勳位伊藤公題字　大隈伯自序　江森巻吉君編

●大隈伯百話　大版上製　金文字入　正價貳圓八十錢　郵稅十錢

米國ヤール大學教授哲學博士　朝河貫一君著

●日本の禍機　大版　全一冊　正價五拾八錢　郵稅十錢

山崎梅處譯述

●ルードヴヰルト全集　大版上製　金文字入　正價壹圓　郵稅八錢

英國リチヤードソン氏著　實業之日本社譯述

●最新讀書法　中版　全一冊　正價四十錢　郵稅六錢

山力春峰君著

●讀書便覽　三六版　美本　正價廿錢　郵稅四錢

實業之日本社編集

●東西名士發奮の動機　上製　金文字入　正價壹圓拾錢　郵稅八錢

佐藤青吟君著

●學生の前途　中版　全一冊　正價廿五錢　郵稅四錢

大隈伯序　永井柳太郎君著

●英人傳　銀實　思ひ出の記　中版　全一冊　正價八拾錢　郵稅八錢

高須梅溪君著

●滑稽趣味の研究　中版　全一冊　正價六拾錢　郵稅六錢

文學士　藤田鳳君著

●實用文字便覽　袖珍上製　正價五拾五錢　郵稅六錢

實業之日本社編

●優等學生勉強法　袖珍並製　正價廿錢　郵稅四錢

加治木常樹君著

●西郷南洲書簡集　大版上製　眞蹟寫眞　正價九十錢　郵稅八錢

◎新刊書類

波邊白水君著

●少女美談　上製並製　正價七十五錢　正價六十錢　郵稅各八錢

下田二歌子女史著

●婦人禮法　大版上製　正價壹圓廿錢　郵稅十二錢

村田天籟君著

●婦人の心理　大版　全一冊　正價六十錢　郵稅八錢

富益、鈴木、田中、三君合著

●實用園藝全書　大版上製　正價壹圓　郵稅十二錢

屋龍渓塾々長　鎌田栄吉君著

●獨立自尊　大版上製　正價壹圓卅錢　箱入美本　郵稅十貳錢

法學博士 新渡戶稻造君著
● 修養 大版上製 正價壹圓卡錢 箱入美本 郵稅十二錢

加治木常樹君著
● 西鄉南洲書翰集 大版上製 正價九十錢 郵稅八錢

讀賣新聞記者松川二郎君著
● 南米と南洋 中版全一冊 正價五拾錢 郵稅六錢

手紙雜誌主幹 桑田春風君著
● 男女修養 家庭書簡 中版全一冊 正價七十錢 郵稅八錢

東華水 島田元慶君合作
● 青い鳥 中版美本 正價卅錢 郵稅四錢

少女の友主筆 星野水裏君著
● 日時計 新體詩 濱千鳥 小美本版 正價廿五錢 郵稅四錢

文學士 岩佐白鷗君著
● 烈婦の面影 大上製版 正價七十錢 郵稅八錢

高須梅溪君著
● 新時代普通文 中全一冊版 正價五十錢 郵稅六錢

報知新聞記者 鹿島櫻巷君著
● 江藤新平 中全一冊版 正價四十錢 郵稅六錢

新渡戶、坪內、和田垣三博士監修、實業之日本社編
● 英和俗語熟語故事大辭典 大版上製 正價四圓卅錢 眷皮美本 郵稅廿四錢

早稻田大學講師 土屋喜吉君著
● 實踐會計整理法 大全一冊版 定價五十錢 郵稅六錢

嬌溢生著
● 名士奇聞錄 目下印刷中

篠原錄次君著
● 地方青年團體及事業 四六全一冊版 正價金五十錢 郵稅金六錢

文學博士 谷本富君著
● 女子教育 目下印刷中

日本女子大學長 成瀨仁藏君著
● 進步と教育 目下印刷中

農法學博士 新渡戶稻造君著
● 世渡の道 目下印刷中

實業之日本社發行 五大雜誌 !!

▲實業之日本 ▲一冊拾壹錢郵稅一錢▲每月二回一日十五日發行▲春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共壹圓五十五錢▲一年分增刊共三圓▼

▲婦人世界 ▲一冊拾五錢郵稅一錢五厘▲每月一回一日發行▲半年分增刊郵稅共壹圓五錢▲一年分增刊共二圓五錢▼

▲日本少年 ▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓卅五錢▼

▲少女の友 ▲一冊拾錢郵稅一錢▲每月一回一日發行▲春秋二回增刊▲半年分增刊郵稅共七十錢▲一年分同壹圓卅五錢▼

▲幼年の友 ▲一冊拾錢郵稅五厘▲每月一回一日發行▲六冊郵稅共五十八錢▲十二冊同壹圓拾錢▼

世渡の道

農學博士　法學博士
新渡戸稻造先生著

△「世渡の道」は萬人を通じての經典にして「獨立自尊」は社會全體の修養經典也。

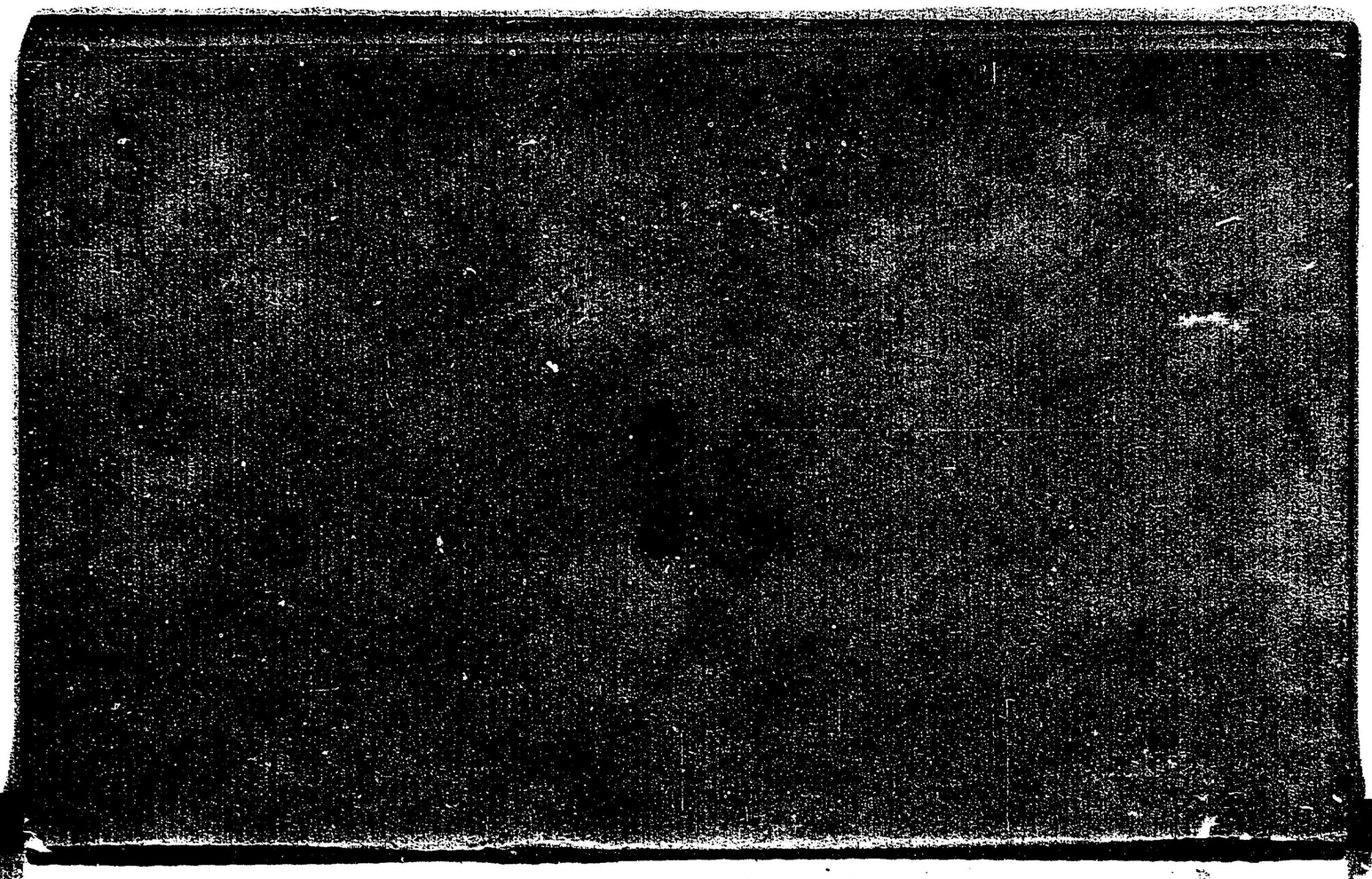
△兩先生が其學殖に於て、其識見に於て、其人格に於て、現代の木鐸たり、青年愛仰慕の中心たることは、贅を要せず。

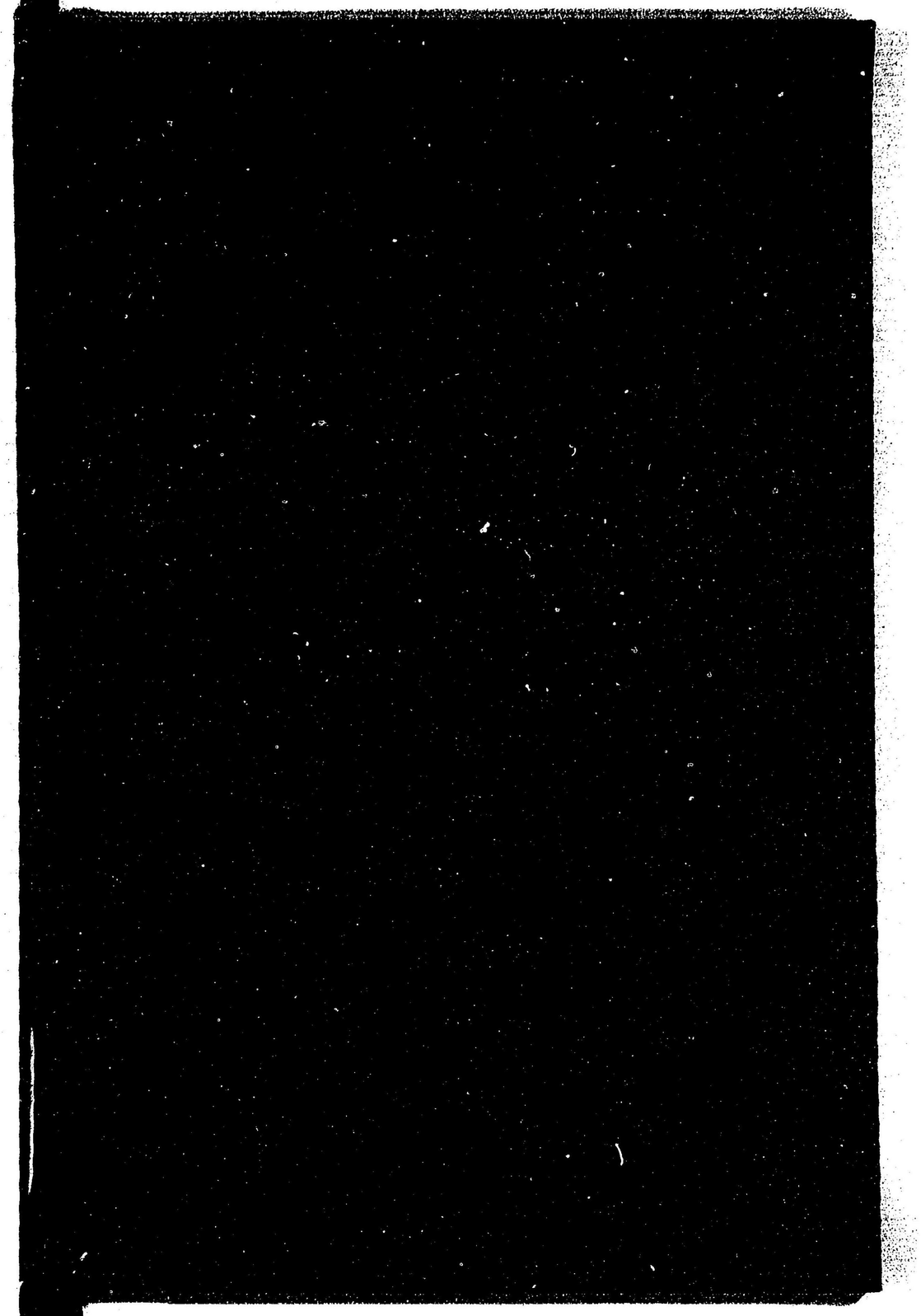
△此の兩書は、兩先生が平生の蘊蓄を傾倒して作成せられたる嶄然たる大著。本社は四十四年に於ける讀書界の二大名著として、敢て讀者諸君に薦む。

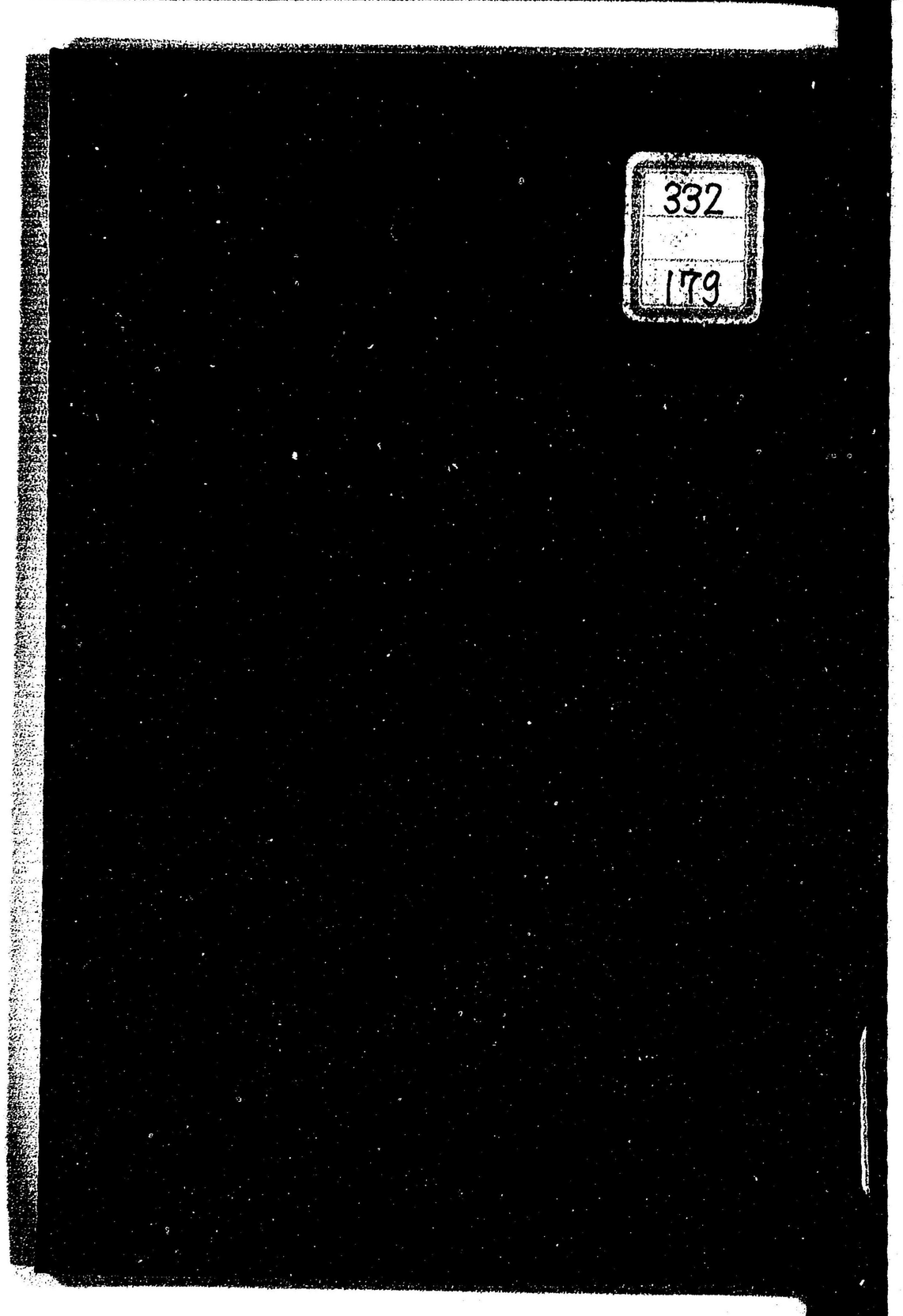
獨立自尊

貴族院議員
醫學博士
謙田榮吉先生著

5







048527-000-3

332-179

地法青年団体の組織及事業

篠原　禄次／著

M44

BEI-0069